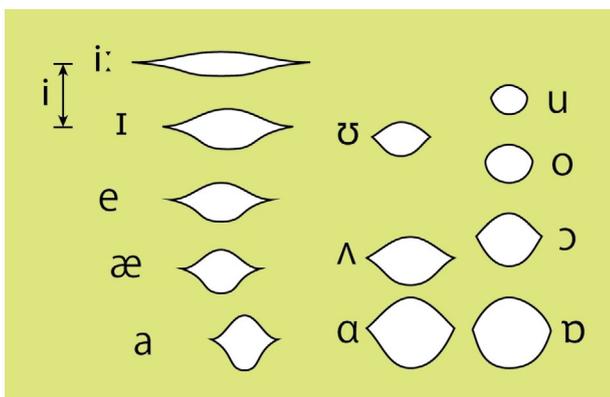
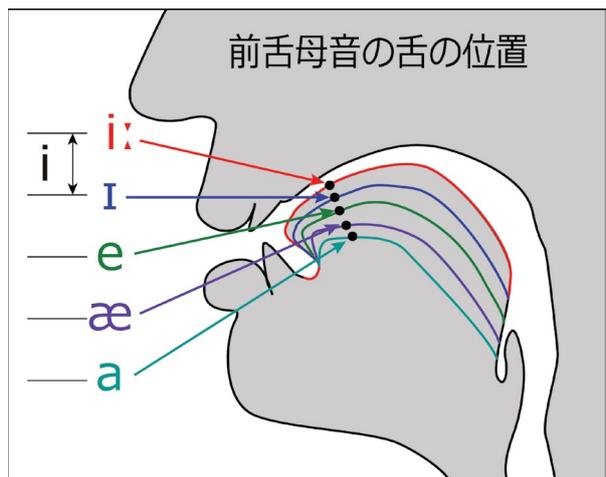
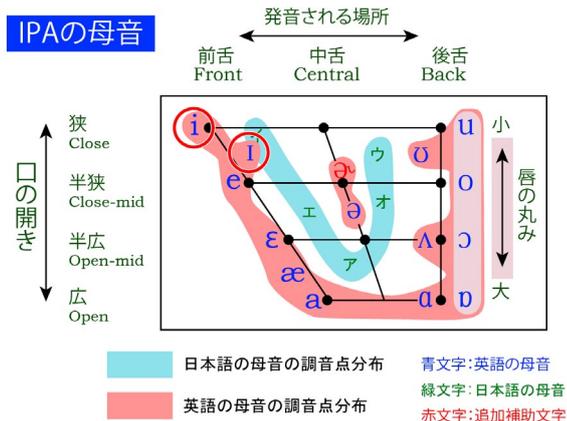


★ /i:/, /ɪ/, /i/ の発音



ここでは、/i:/, /ɪ/ そして /i/ といった記号で表される音について説明します。

英語の母音を理解するには、母音同士の相対的な関係を、口の開きや舌の位置を段階的に比較してみるとよいでしょう。

「前舌母音」と呼ばれる口の前方で発音される母音として、左上の図を見ると /i:/, /ɪ/, /e/, /æ/, /a/ といった母音が並んでいます。

これらの母音は上にあるものほど「口の開きが狭く、唇の両側が強く横に引かれる」構えとなります。そして下に行くほど「唇を左右に引く緊張が弱まり、同時に顎が下がって口の開きが大きく」なっていきます。すなわち一番上にある /i:/ を発音する「最も開きが狭く、左右に唇が引かれている」構えと、一番下にある /a/ を発音する「最も開きが大きく、左右に唇を引く緊張がない」構えの間に、その中間となる口の構えを段階的に探し出すことができます。

右上の図は、それらの母音を発音するときの舌の高さを段階的に示したものです。やはり /i:/ を発音するとき舌が最も高い位置にあり、/a/ の発音では最も低い位置にあることがわかりますね。

記号として /i:/ と小文字の “i” に長音記号のついた音と /ɪ/ という大文字の “I” を小さめに書いたような記号がありますが、それぞれの図を見て分かりますとおり、単純に音の長さの差ではなく、口の開きも、舌の位置も違う「別の音」です。

そして長音記号のついていない小文字 “i” だけの /i/ という記号は、この /i:/ と /ɪ/ の間のどの音を使っても構わないとされます。例えば happy /hæpi/ という単語の末尾の -y の部分の発音ですが、これは人によって /hæpi:/ のように発音する人もいれば、/hæpɪ/ と読む人もいて、どちらでも構わないとされています。これは決まって単語の末尾だけに現れ、かつアクセントがないときの発音となります。若い年代の人ほど /i/ を /i:/ の音質で読む傾向が強そうですが、アクセントがありませんので、eat の母音に比べると音の長さは短くなります。

日本人学習者としては、やはり /i:/ と /ɪ/ について明確な発音の区別を習得するべきでしょう。

中学や高校初級向けの入門用英和辞典などでは、覚える記号の種類を減らすために /ɪ/ の記号を用いず、/i/ と /i:/ だけを使って発音を表記しているものもありますが、「音質そのものが違う」ため、やはり記号も別のものを使うことが結局不要な混乱を避けられるのではないかと感じます。そこで本書では記

号の種類は多少増えてしまいますが、/i:/ と /ɪ/ を区別することとし、多くの上級者用英和辞典や英英辞典の表記に合わせることにします。この2つのどちらの音質で発音しても構わない短めの /i/ についてはあえてそれだけを独立させて練習する必要はないでしょうから、/i:/ と /ɪ/ の2つについて違いをはっきり区別できるような練習課題を設定します。

/ɪ/ の発音

/ɪ/ の音は、日本語でいうと「イ」と「エ」の中間の音です。この2つの仮名の音を実際に交互に出して見て、徐々にその中間をさぐってみましょう。「エ」ほど口を上下に開けず、「イ」ほど口を左右に引かない。音としては「イだと思えばイに聞こえる。エだと思えばそうも聞こえる」という、ちょっと中途半端な印象を感じるでしょう。それが /i/ の音です。日本語の「イ」で置き換えると、どうしても音が硬くなりすぎる傾向があります。ただしそれで通じないわけではありません。調音点表を見ても「イ」と /ɪ/ はかなり接近した位置にありますので、代用したとしても「日本語なまりを感じるけれど意味の理解に支障はない」という程度の差です。それでもこの /ɪ/ の音は実に多くの英単語に含まれる母音ですので、是非とも十分な練習を積んでいただきたいと思います。

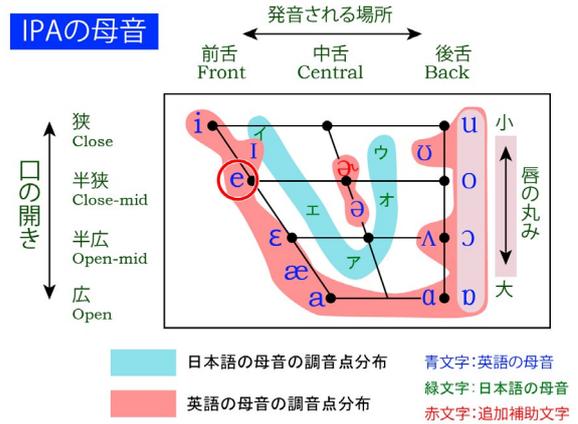
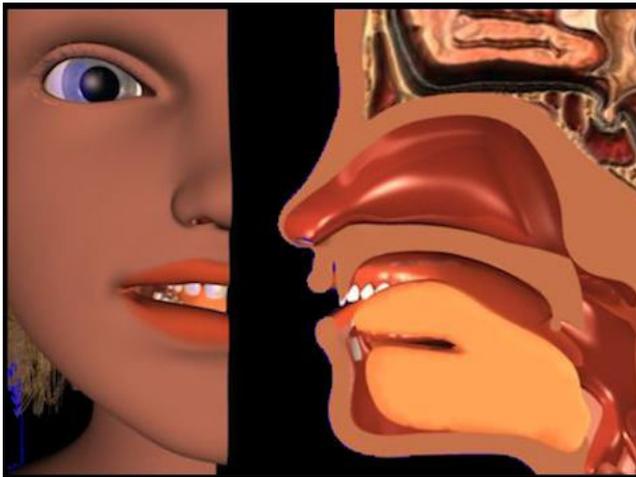
/i:/ の発音

/i:/ の方は非常にはっきりした音なので習得は容易でしょう。すべての母音の中で最も前、最も上に調音点がある音、つまり、明るくはっきりした、堅い音色です。日本語で「イー」と言いながら、意識的に口の中の舌の前の部分をもっと持ち上げて上あごに近づけてみてください。すれすれまで近づけてしまうと子音のYの音(記号では /j/)になってしまいますので、日本語の「イ」よりは心持ちもう少し上という程度でよいでしょう。

- it それ /ɪt/
- eat 食べる /i:t/
- mitt ミット /mɪt/
- meet 会う /mi:t/
- sit 座る /sɪt/
- seat 座席 /si:t/
- hit 打つ /hɪt/
- heat 熱 /hi:t/
- ship 船 /ʃɪp/
- sheep 羊 /ʃi:p/



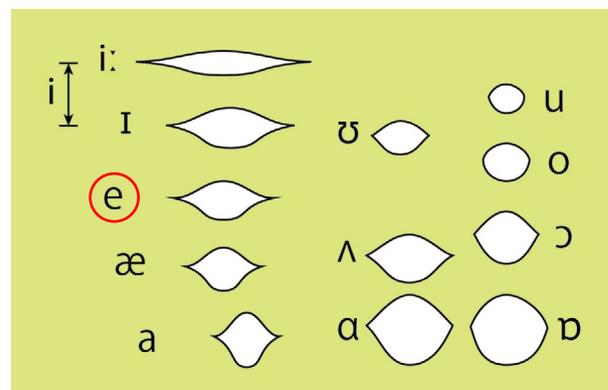
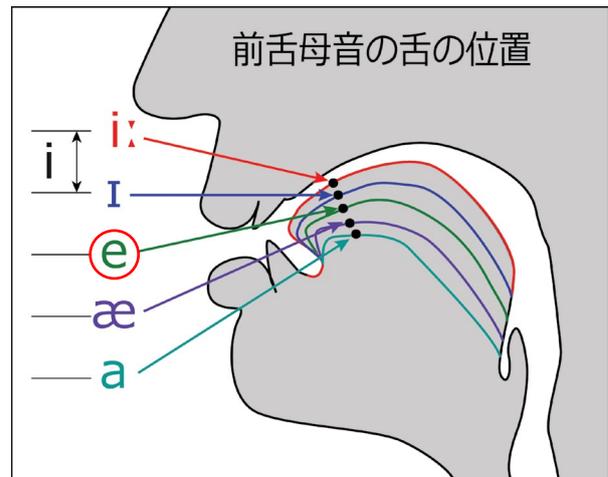
★/e/ の発音



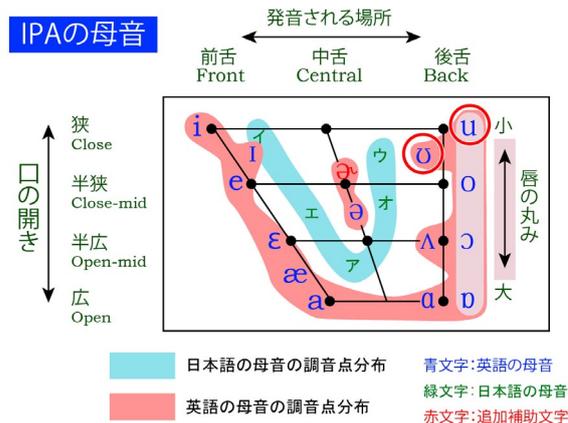
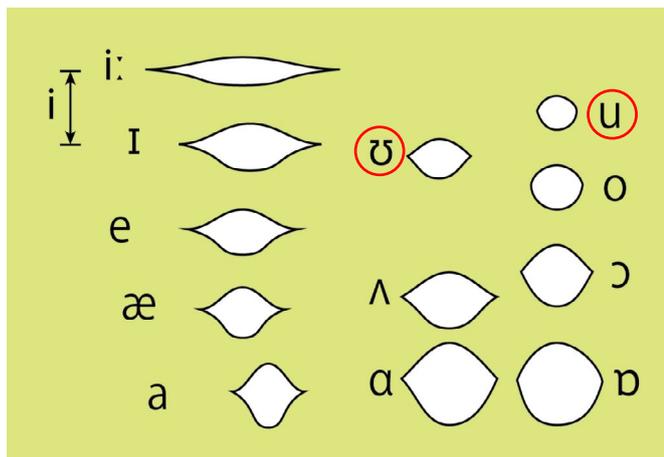
記号としては普通のアルファベットの e と同じですね。これも日本語の「エ」で代用して意味の理解に支障はきたしません。英語本来の音としては、上右の調音点表を見て分かる通り、もっと前、もう少し上で出される音です。日本語の「エ」より意識的に口の左右を引き気味にして発音してください。舌の位置としては、/i:/ より舌の位置は低めです。簡単に言えば「はっきりとした『エ』の音を出す」という感じですね。

先ほど /i:/ と対象させて /ɪ/ を練習しましたが、今度はこちらの /e/ と /ɪ/ を対象させてその区別をしっかりと認識するようにしましょう。

- pit 穴 /pɪt/
- pet ペット /pet/
- sit 座る /sɪt/
- set 据え付ける /set/
- mitt ミット /mɪt/
- met 会った /met/
- pin ピン /pɪn/
- pen ペン /pen/
- disc 円盤 /dɪsk/
- desk 机 /desk/



★/ʊ/, /u:/, /u/の発音



/ɪ/ と /i:/ が音の長さだけでなく質も違うということを述べましたが、今回の /ʊ/ と /u:/ もやはり、音の質に違いがあります。

調音点として /ʊ/ と日本語の「ウ」はかなり近い位置にあります。上図(左右とも)を見ていただくと分かりますが、/ʊ/の音は/a/ の顎の開きが小さくなったもの。それに対して /u/ は /ɒ/→/ɔ/→/o/→/u/ という並びの中にあり、言うなれば「オ」の口の丸みを非常に狭くした音です。

この2つの母音を区別する上で意識すべきなのは、/ʊ/ は「ア」の仲間であり、顎の開きの大小の違いであるのに対して、/u/ は「オ」の仲間であり、口の丸みはその音の特徴づける重要なポイントです。

/ʊ/ の発音では口を丸めることを意識せず、顎(口)の開きを小さめにしつつ、舌の後部を高くして発音されます。

/u/の方は、唇を丸くすぼめることを意識します。この発音でさらに唇を小さく丸めるともう母音ではなく、子音の /w/ になるわけです。唇を小さくすぼめるということは頬や唇の左右の筋肉に力が入りますので、特にアクセントのある場合や長母音 /u:/ として現れる場合に、/ʊ/ との音質的な差が際立ってきますが、アクセントのない /u/ はそういう頬や唇の緊張が弱まるため、/ʊ/ と /u:/ の中間的な音として発音されることが多くなってきます。

/u:/ の音は調音点図で見て分かる通り、口の最も奥で、最も上に調音点があります。つまり口の中の容積は広げつつ(舌をまず全体にべったり下げる)、舌の付け根部分だけが盛り上がる形となります。唇の丸めは母音の中で一番強く、これ以上丸みを強めると、もう子音の /w/ の音になってしまいます。

まだ英語が今ほど日本に浸透していなかった時代、外来語は主に耳から聞いた印象を文字にして書き表しました。だから古い外来語と新しい外来語で文字使いが変化した例もあります。たとえば machine という単語は、最初 ミシンに聞こえ、それが裁縫の用途のミシン(sawing machine)として定着し、machine というスペルをローマ字に近く読めるようになってからマシンという書き方が加わり、こちらは機械全般の意味に使い分けるという面白いことを日本人はしました。他にも glass は「ガラス」と「グラス」で材質と器の意味に使い分けますね。cook (料理人) という単語も、/kuk/ という発音なので今なら「クック」と表記されたところでしょうが、この単語が入ってきたときは「耳で聞いた印象」を文字にしたため、「コック」という外来語が料理人の意味として定着しました。このことから /u/ の音は日本語の「オ」に近く響くということが伺えるのです。他の例としては、hook / huk/ が現代では「フック」ですが、古い外来語では「ホック」ですね。

それでは /ʊ/ と /u:/ の音を含んだ単語の発音練習をしましょう:

- book 本 / bʊk /
- look 見る / lʊk /
- cook 料理人 / kʊk /
- good よい / gʊd /

- you あなた / ju:/ (発音記号での j は「y」の音)
- who 誰 / hu:/
- do する / du:/
- use 使用 / ju:s /

※“you” や “do” には弱形と強形発音がありますが、ここでは強形発音で練習します。

- pull 引く / pʊl /
- pool 水たまり / pu:l /

- full 満ちた / fʊl /
- fool 愚か者、道化師 / fu:l /

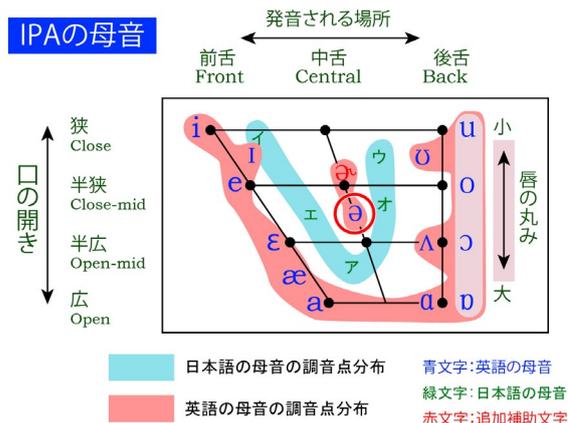
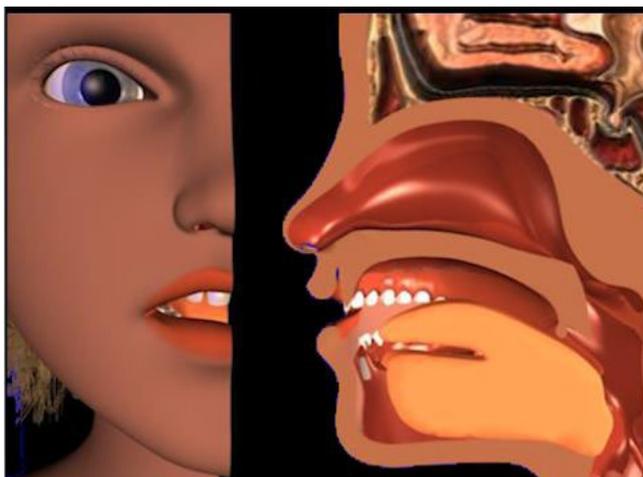
I am full.



I am
a fool.



★/ə/ の発音



この e の文字をひっくり返したような記号は、a の文字を元にしたもので、**曖昧母音**(schwa)と呼ばれる非常に特殊な母音です。

調音点一覧を見ると、他の英語の母音は、「はっきり前後や上下」に分布しているのに、この /ə/ だけは唯一例外的にど真ん中にありますね。この「あらゆる母音の真ん中」にあるということが、「アイウエオ」のどの音でもなく、どの音にも聞こえるという非常に「曖昧な」性質を生んでいます。

舌は力をいれずただべったり寝かせて置くだけの気持ちで構いません。口はほんの軽く「だらしなく」開ける気持ちで。舌にも顎にもまったく力を入れません。まるで朝目覚めたばかりの眠気の中で、まだはっきり言葉が言えないような状態を想像してみてください。

要領としては、最初普通に「アイウエオ」を繰り返し言いながら、徐々にその発音を「だらしなく」していき、最後は「アイウエオ」が全部同じ音になってしまう感じです。どの音でもなく、どれかの音だと思い込んで聞けばその音にも聞こえる。そんな「曖昧」な音がこの /ə/ の音なのです。

唇の形もやはり中途半端で、何かの音を出そうとしないことで、この音の形になると言えるでしょう。

口の中のどこにも力を入れずに発音するという事は、この音を表す単語の音節部分にもアクセントが置かれないということでもあります。決まって「弱く発音する音節」にこの音が現れ、スペルとしては「あらゆる音が弱まった結果」であるため、どんな母音文字が使われることもありえます。この音は、もともと「もしももっと強く発音していたら他のいずれかの母音になっていたところ」がアクセントが他の音節にあるため、その反動で弱い音になったものですから、実際には「もともとの音」にやや寄った音として発音されることもあります。

たとえば Japan (Ja-pan) / dʒəpæn / の第 1 音節に現れる /ə/ は、「a」に寄った音になりますし、today (to-day)の第一音節では、to / tu / が弱まった音なので、多少は / u / に寄った発音としても問題はありません。

さらに個人差もあり、behind (be-hind) という単語は / bɪhænd / と発音する人もいますし、第 1 音節をさらに弱形化して / bəhænd / と読むのも標準的な英語です。

この曖昧母音は、もともと独立して存在した音というより、他のあらゆる母音が弱まった結果の音と考えることができます。英語は「強弱」のアクセントを用いる言語だというお話をしましたね。強く読む音節の母音は、より明確化するのに対して、アクセントのない音節の母音は、より不明確化する傾向にあります。アクセントがないことによって、どれくらい不明確な音になるかは地方差や個人差もあります。

mountain(山)という単語をご存知ですね?これは moun-tain という 2 音節の単語で、アクセントは第

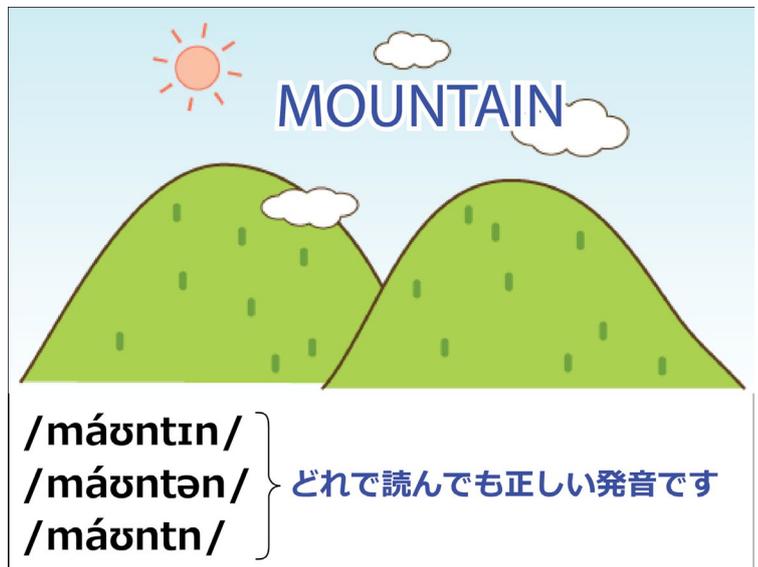
1 音節にあり、単語としての発音は辞書によって何通りか書かれています。

本来なら「-tain」というスペルは強く発音していれば / teɪn / と読みたくなるどころです。しかし、第 1 音節にアクセントを奪われた結果、/ eɪ / というはっきりした母音が弱まり、/ e / → / ɪ / と、より力の抜けた音へと変化しました。そして実際に標準的な英語として用いられているのは次の 3 通りの発音です。

- 1、/ máʊn-tɪn / 第 2 音節が / -tɪn /、つまり母音は / ɪ /。あまり弱形化が極端でない発音。
- 2、/ máʊn-tən / 第 2 音節が / tən /、つまり母音の弱形化がかなり進んだ発音。
- 3、/ máʊn-tn / 母音の弱形化がもっとも極端に進むと母音そのものが脱落します。

強弱の差が極端になるのは特にアメリカ英語に見られる傾向ですが、上記 1～3 のどの発音を英米いずれで用いても問題はありません。

このようにもともとどんなスペルであっても、その音節の母音にアクセントがないため、読み方が弱くなったのが、曖昧母音 / ə / なのです。アクセントがないことによる音の変化を「弱形化」といいますが、これについては、別の項目の中で改めて詳しく説明します。



では曖昧母音 / ə / を含んだ単語の発音練習をしましょう。ポイントは、この母音の「音」それ自体より、アクセントが他の音節にあるということ意識し、強い音節に対して、この曖昧母音のある音節を弱く読むということです。その母音の弱さが「音質的な曖昧さ」となり、この音の発音になります。

- Japan 日本 / dʒə-pæɪn /
- banana バナナ (Am)/ bæ-næɪn-ə / (Br) /bæ-náɪn-ə /
- woman 女性 / wʊm-ən /
- common 共通の (Am)/ ká:m-ən / (Br)/kɒm-ən/
- today 今日 / tə-deɪ /
- tomorrow 明日 (Am)/ tə-má:r-ou, tə-mó:r-ou / (Br)/ tə-mɔr-ou/
- America アメリカ / ə-mér-ɪ-kə /
- butterfly 蝶 (Am) / báɪ-ə-fláɪ / (Br)/ báɪ-ə-fláɪ /

※ butterfly のアメリカ式発音で、第 2 音節の発音に使われている / ə / という特殊な記号はアメリカ英語特有の「r-colored vowel (R の音色を帯びた母音)」というもので、この次の項目の中で解説します。

★r-colored vowel (Rの音色を帯びた母音)

ここではアメリカ英語に特徴的な「Rの音色を帯びた母音」というものについて解説します。

イギリス英語では、たとえば“bird”という単語は / bɜ:d / と発音され、スペルにRが含まれていてもそれが音としては現れません。それに対してアメリカ英語ではスペルのRが発音にも現れます。“bird”のアメリカ式発音の表記としては辞書によって異なっており、

bird = / bɜ:rd /, / bɜ:rd/, / bɜ:d /

といった記号が用いられています。いずれも同じ音を表しているのですが、発音記号の使い方の方針が異なるだけですから、どれでも構わないのですが、本書では / bɜ:d / の記号を採用します。

/ bɜ:rd /: この書き方では / ə / 音をただそのまま伸ばしたあとで / r / 音が続けると解釈されがちですが、実はそうではなく、/ ɜ:r / という「1つの音」を意味しています。しかしそれが分かりにくいという欠点があります。

/ bɜ:rd / という表記を採用している辞書も多いのですが、これもまた / ɜ: / + / r / と解釈されやすく「母音の音質そのものの特殊性」が直感的に伝わりにくいところがあります。

そこで本書は標準 IPA には含まれておらず補助記号である / ɜ̥ / を用いて、このアメリカ英語特有の音質を表すことにしました。/ ɜ̥ / は単母音 (Simple Vowel) です。つまり発音開始から終了まで唇、顎、舌に動きがなく一定の音として発音されます。それが長母音の / ɜ̥:/ であっても同様であり、/ ɜ̥:/ と伸ばしたあとで / r / が追いかけるというわけではありません。

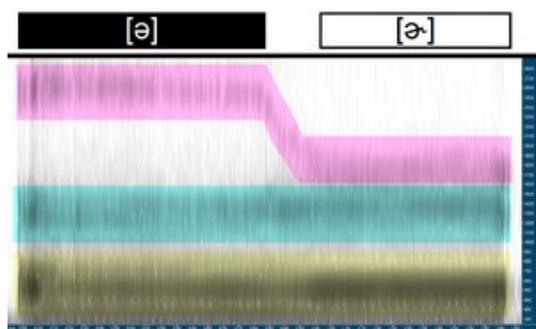
左の調音点一覧を見ていただきますと、/ ɜ̥ / は、普通の / ə / よりわずかに上に位置しています。これは / ɜ̥ / を発音する際の舌の構え方が少々特殊であり、単に舌の中央部が / ə / より高いというのでもなく、スプーンの表面のように中央がくぼみ、両側が上の歯の横の部分に接触するような形を作ります。/ r / を発音するように舌先をやや巻き上げ気味にしてもよいでしょう。

あるいは極端なことをいって、/ r / の音そのものを出してしまってもよいのです。

言うなれば「子音として使うときは / r / であり、母音として使うときは / ɜ̥ / の記号を用いる」ということだと理解して

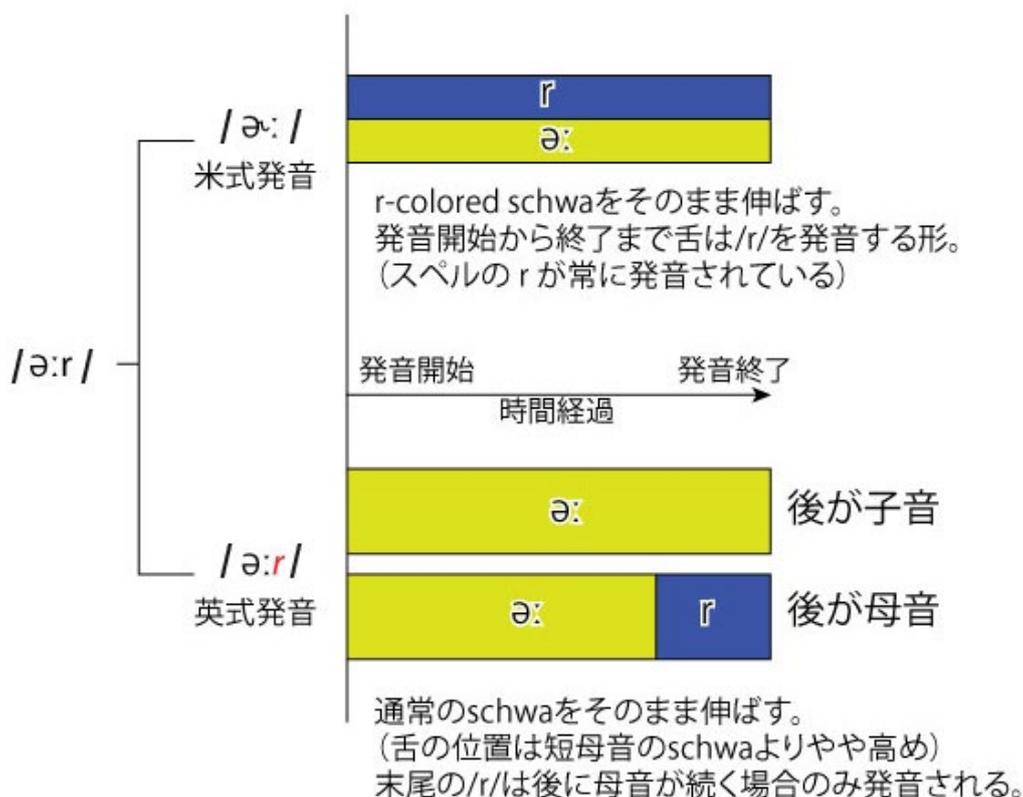
ください。実際、辞書によっては / brd / とまったく母音文字を使わず、bird の発音を表記しているものすらあるのです。

ただ / ə / を伸ばしただけの音と、/ ɜ̥ / を長く発音したときの聞こえの違いを確認してみてください。



左のスピーカーアイコンをクリックして / ɜ̥:/ と / ɜ̥:/ が連続的に発音されている音声サンプルを聞いてみてください。どちらも「1種類の音」が途中変化せずそのまま延びていることと、/ ɜ̥:/ と / ɜ̥:/ では確かに音色に違いがあることが理解できるでしょう。

このように母音を発音するとき、最初から舌を / r / 構えにして出す音を「Rの音色を帯びた母音 (r-colored vowel)」といいます。



イギリス式発音の表記方法として /ə:r/ というものがあります。これは /ə:/ にイタリック体の **r** が添えられた記号で、辞書によっては、/ə:(r)/ と r の文字を括弧に入れて同じ意味を持たせているものもあるのですが、この記号が意味するのは「r の音を出しても出さなくてもいい」というのではなく、「後に母音が続かないときは /ə:/ と発音され、あとに母音が続く場合に限って /r/ の音が現れるということ

を意味しています。ですから、後に母音が続いて /r/ が音として現れる場合であっても、/ə:/ の音は同じであり、ただ曖昧母音と同じ音質をそのまま伸ばせばよいのです。

しかしアメリカ英語の発音である /ə/ ではあとに続く音と無関係に常に発音に「r の音色」が与えられます。では実際にこの母音を含む単語を英米それぞれの発音でよく聞き比べてみましょう。(このテキストでは米英の順で発音が示されていますが、リンク先の Oxford Advanced Learner's Dictionary はイギリスの出版物ですので、イギリス式発音が左になっています。)

/ə:/ /ə:/ を含む単語の例:

- bird 鳥 (Am)/ bə:d/ (Br)/ bɜ:d /
- girl 少女 (Am)/ gɜ:l/ (Br)/ gɜ:l /
- heard 聞いた (Am)/ hɜ:d/ (Br)/ hɜ:d /
- word 単語 (Am)/ wɜ:d/ (Br)/ wɜ:d /
- work 仕事 (Am)/ wɜ:k/ (Br)/ wɜ:k /
- hurt 傷つける (Am)/ hɜ:t/ (Br)/ hɜ:t /

「r-colored vowel」と呼ばれる母音には、これまでに説明した /ə:/ のほか、 /ɑ:r/ や /ɔ:r/ も含まれるとされていますが、これらは /ɑ:/ や /ɔ:/ を普通に発音し、末尾に /r/ の音を添えるだけなので特殊性はありません。それでも一応、スペルに含まれる /r/ 音までで「1つの母音」と見なされているため、本書では /r/ 音を含まない /ɑ:/、/ɔ:/ と /ɑ:r/、/ɔ:r/ を別母音と数えることにしたわけです。

father (Am) /fɑ:rðə/ (Br) /fɑ:ðə/
farther (Am) /fɑ:rðə/ (Br) /fɑ:ðə/

上の2つの単語は、イギリス式ではまったく同じ発音です。しかしアメリカ式では第1音節の発音が異なります。father(父親)は、第1音節のスペルに r を含んでいませんので発音にも現れません。しかし、farther (far の比較級)は、第1音節のスペルが far- なのでその r が常に発音に現れます。

これらの例でアメリカ式発音による father の第1音節母音は r-colored ではありませんが、farther の第1音節母音は、r-colored となり、「別の種類の母音」と分類されるわけです。

しかし /ɑ:/ の部分だけについては father, farther とまったく同じ発音なので、これらを別の種類の母音と分類しない考え方もあります。

もう1つ /ɔ:r / を含む語についても見ておきましょう。

- course (Am) /kɔ:rs/ (Br) /kɔ:s/ コース、道
- sort (Am) /sɔ:rt/ (Br) /sɔ:t/ 種類
- sore (Am) /sɔ:r/ (Br) /sɔ:r/ ひりひりする
- pour (Am) /pɔ:r/ (Br) /pɔ:r/ 注ぐ

★重母音

これまで英語の母音のうち「短母音(Simple Vowels)」について見てきました。ここからは「重母音(Complex Vowels)」について学びます。

本書では下の表の通り、二重母音が8種類、三重母音が2種類という分類に従って解説しますが、二重母音や三重母音を何種類と数えるかについては、何通りかの考え方があります。発音を学ぶ上では、そういう学説的な違いはあまり大きな問題ではなく、要するに正しく単語が発音できさえすればそれでよいのですが、あとあと学習に迷いが生じないように、「重母音」とはどのようなものを先ず理解することにしましょう。

American English

単母音 Simple Vowels (16)	単母音 monophthongs (16)	短母音 short (9)	ɪ i e æ ʌ ʊ ə ə
		長母音 long (7)	ɑ: ɑ:r i: ɔ: ɔ:r u: ə:
重母音 Complex Vowels (10)	二重母音 diphthongs (8)	aɪ eɪ ɔɪ oʊ aʊ ɪə ɛə ʊə 註1	
	三重母音 triphthongs (2)	aɪə aʊə 註2	

註1:/ɪə ɛə ʊə/ については二重母音とせず /ɪr ɛr ʊr/ と「単母音+r」と見なす考え方もある

註2:註1の考え方を当てはめるとアメリカ英語に3重母音はないという考え方になる。

British English

単母音 Simple Vowels (16)	単母音 monophthongs (16)	短母音 short	ɪ i e æ ɒ ʌ ʊ ə ər 註3
		長母音 long	ɑ: ɑ:r i: ɔ: ɔ:r u: ə:r
重母音 Complex Vowels (10)	二重母音 diphthongs (8)	aɪ eɪ ɔɪ əʊ aʊ ɪər ɛər ʊər	
	三重母音 triphthongs (2)	aɪər aʊər	

註3:イタリック体の「r」は「後に母音が続く場合にのみ発音される」意味。これを (r) と表記する辞書もある。

★単母音と重母音の違い

単母音 (Simple Vowel) と呼ばれる音は、その音が発せられる最初から最後までを通じて、調音器官 (唇、歯、舌など) に動きがないものを指します。音の長い短いに関係なく、音の出し始めから出し終わりまでを通じて「同じ口の構え」を保ったまま発音されるのが単母音です。

それに対して、2つあるいは3つの母音を連続的に、それも「1拍」の中に収めるように発音するのが重母音 (Complex Vowel) であり、最初に発音される母音が音の中心となりつつも、直後に続く別の音質の母音を発音するため、1拍の中で調音器官に動きがあります。

日本語の「愛(あい)」という言葉は、「あ、い」それぞれが1音節ずつを構成しており、/a.i/ という2音節ですが、英語の“I (=私)” という単語の発音は、/aɪ/ で一拍、1つのまとまった音と認識されます。

/aɪ/ という表記が「2つの母音が並んでいる」という視覚的印象を与えがちであることから、辞書によっては、/aⁱ/ というふうに後の母音を前の母音の右肩に添える特殊記号を用いているものもあり、これはなかなかよいアイデアだと思うのですが、本書では多くの辞書で一般的に採用されている /aɪ/ の表記を用いることにします。

二重母音や三重母音について考えるとき問題になってくるのが音節末尾に /r/ の音を持っている場合です。イギリス英語ではまず問題になりませんが、アメリカ英語の発音ではスペルの /r/ が常に発音にも現れるため、そういう音節の母音については、二重母音と見なすべきかどうかについても意見が分かれることがあります。

たとえば heart (「心、心臓」) という単語のアメリカ英語での読み方は、/hɑ:rt/ と表記されますが、母音 /ɑ/ の発音から /r/ に移るとき実際には、/hɑərt/ のように読まれています。はっきりと大きな口を開けた /ɑ/ の発音をした直後、舌先が持ち上げられますが、そのときの音を「子音の /r/」とも見なせば、母音の /ə/ が続いていると見ることもできます。前者の考え方では「単母音+r」ですが、後者の見方によれば heart の母音は、/ɑə/ という二重母音だということもできるわけです。

見方の違いはあっても実際の発音は同じであり、聞こえの印象にも違いはありませんから、「そういう考え方、見方もある」と知っておいていただくだけで結構です。こんな些細な知識でも、知っておくと、辞書ごとに違った色々な発音表記に出会っても驚かずに済むでしょう。

どうもアメリカ英語というのは特に /r/ の音がからんで来たときに限って音声学的には扱いの難しいところが出てきます。それは /r/ が「子音と言えれば子音であり、母音と見なせばそう見なせなくもない」という音声的な特徴を持っているからです。話をシンプルにするため、本書では一環して「/r/ は常に子音。同じ音でも母音は /ə/ と表記する」という立場を取ります。

hear, air, cure といった単語も一般的には、/hɪə, eə, kjʊə/ という二重母音を含む語と見なされていますが、Oxford Advanced Learner's Dictionary をはじめ、これらのアメリカ英語発音は /hɪr, ɛr, kjʊr/ という「単母音+r」だと表記しているものもあり、そう考えた場合、これらの語の母音は二重母音ではなくなります。

要するにアメリカ英語では音節末尾の r を常に発音するため、何らかの母音のあとに /r/ が来ると、それを発した音を「子音 /r/ の音」と見なすか、「母音 /ə/ の音」と見なすかによって二重母音に分類すべきかそうでないか、見方が変わってくるわけですね。

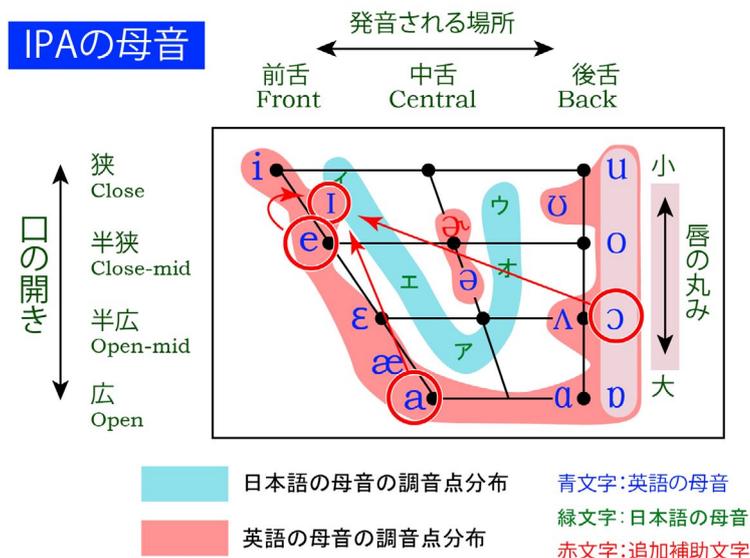
この問題はそのまま三重母音の判定にも当てはまります。fire, hour といった単語のアメリカ式発音を /faɪə, aʊə/ と三重母音に含めるか、/faɪr, aʊr/ という二重母音だと見なすか、どちらの立場に立つことも可能です。(どちらも間違いではありません)

本書では、これらを三重母音と見なす立場を取ることになります。

★/aɪ/, /eɪ/, /ɔɪ/ の発音

二重母音はいずれも最初の母音をはっきりと発音し、その直後にあとの母音を短めに添えるようにして発音します。音の中心は前の母音であり、「2つの母音がただ並んでいる」という誤解を避け、そういう聴感上の印象を直感的に伝えようとして、/a^ɪ/, /e^ɪ/, /ɔ^ɪ/ といった独自の記号でこれらを表記している辞書もあります。

すでに述べました通り、重母音には単母音で使われなかった記号が使われています。/aɪ/ という二重母音の第1母音は、もともと/a/ を発音しようとしていたのが、あとに続く /ɪ/ へと移行しやすいように無意識に/a/ の発音で調音点が前に移動してしまった結果として現れる音です。ですから特に/a/ 単独の発音を新たに練習しようとしなくても、すでに覚えた/a/ に/ɪ/ を続けようすれば自然と/aɪ/ の二重母音になっています。



それではこれらの二重母音を含む単語の練習をしましょう。

/aɪ/ を含む語		/eɪ/ を含む語		/ɔɪ/ を含む語	
aisle /aɪl/	通路	eight /eɪt/	食べた	oil /ɔɪl/	油
ice /aɪs/	氷	ache /eɪk/	痛む	coil /kɔɪl/	コイル
fine /faɪn/	元気な	ape /eɪp/	類人猿	soil /sɔɪl/	土
nine /naɪn/	9つの	cake /keɪk/	ケーキ	boil /bɔɪl/	沸かす
five /faɪv/	5つの	date /deɪt/	日付	foil /fɔɪl/	箔
right /raɪt/	正しい	late /leɪt/	遅れた	broil /brɔɪl/	あぶる
like /laɪk/	好む	lake /leɪk/	湖	coin /kɔɪn/	コイン
kind /kaɪnd/	親切な	fate /feɪt/	運命	noise /nɔɪz/	雑音
knife /naɪf/	ナイフ	trade /treɪd/	商取引	choise /tʃɔɪs/	選択
mine /maɪn/	私のもの	play /pleɪ/	遊ぶ	boy /bɔɪ/	少年
cry /kraɪ/	泣く	pay /peɪ/	支払う	moist /mɔɪst/	湿った
dry /draɪ/	乾燥した	way /weɪ/	道; 方法	royal /rɔɪ.əl/* ¹	王室の
fly /flaɪ/	飛ぶ	lay /leɪ/	飛ぶ	poison/pɔɪzn/* ²	毒

註1: royal は roy-al の2音節。/ɔɪə/という3重母音ではなく、/ɔɪ/ という二重母音音節のあとに/ə/ で始まる別の音節が続いているだけ。

註2: poison も poi-son で2音節だが、/pɔɪ-zn/ と第2音節に母音がない。これは /pɔɪ-zən/ と曖昧母音があると考えてもいいし、それがさらに弱形化して完全脱落したと見てもよい。/l/, /n/ は末尾などアクセントのない音節で母音なしの「子音音節」を構成することがあり、syllabic consonant (音節を作れる子音) と呼ばれている。

★/aʊ/, /oʊ/ の発音

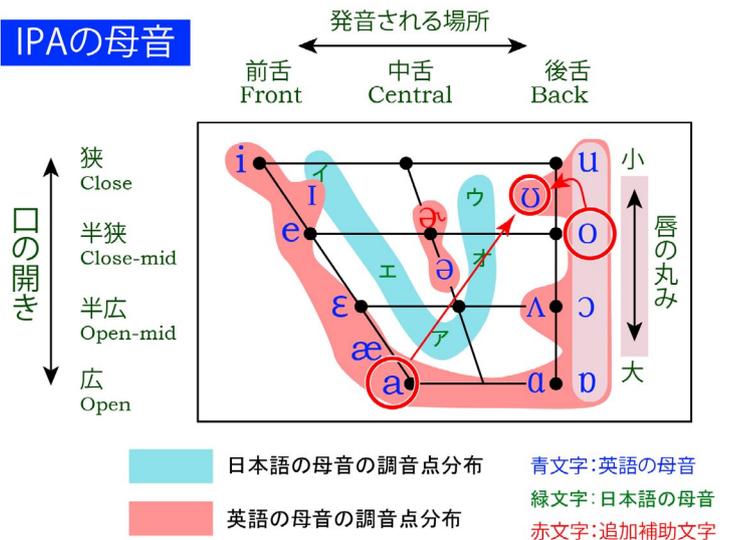
第2母音として /ʊ/ につながるタイプ。

他の二重母音同様、最初の母音が、強く明確に発音された直後、短めに /ʊ/ の音を添える感じ。

これも辞書によっては、/aʊ/ や /oʊ/ という独自表記を採用していることがあります。

二重母音ではしばしばあとに続く母音への連続性が容易になるよう、前の母音の調音点が自然と移動してしまうことがあります。この /oʊ/ でも第1母音が本来の /ɔ/ から /ʊ/ 音への連続性のため調音点が近い /o/ に変化しています。

IPAの母音



なお二重母音 /oʊ/ はアメリカ英語の発音であり、イギリス英語では第1母音の口の丸みが弱まって /əʊ/ と発音される傾向にあります(常にではない)。

/aʊ/ を含む語

out	/aʊt/	外で
loud	/laʊd/	音が大きい
cloud	/klaʊd/	雲
shout	/ʃaʊt/	叫ぶ
house	/haʊs/	家
mouse	/maʊs/	ねずみ
cow	/kaʊ/	牛
bow	/baʊ/	おじぎする
crowd	/kraʊd/	群集
about	/əbaʊt/	～について

/oʊ/ を含む語

go	/goʊ/	行く
boat	/boʊt/	ボート
hold	/hoʊld/	抱く; かかえる
hope	/hoʊp/	希望する
rope	/roʊp/	ロープ
show	/ʃoʊ/	見せる
toe	/toʊ/	足指
road	/roʊd/	道路
load	/loʊd/	積荷
float	/floʊt/	浮かぶ

区別に注意が必要な語

coat	/koʊt/	コート	-	caught	/kɔ:t/	catchの過去・過去分詞形
so	/soʊ/	それほど	-	saw	/sɔ:/	seeの過去形
boat	/boʊt/	ボート	-	bought	/bɔ:t/	buyの過去・過去分詞形
road	/roʊd/	道路	-	broad	/brɔ:d/	幅広い
low	/loʊ/	低い	-	law	/lɔ:/	法律
out	/aʊt/	外で	-	oat	/oʊt/	オート麦の
crowd	/kraʊd/	群集	-	crow	/kroʊ/	カラス
noun	/naʊn/	名詞	-	known	/noʊn/	知られた
south	/saʊθ/	南	-	soul	/soʊl/	魂
bough	/baʊ/	大枝	-	bought	/bɔ:t/	buyの過去・過去分詞形
flow	/floʊ/	流れ	-	flaw	/flɔ:/	傷; 欠点

★/ɪə/, /ɛə/, /ʊə/ の発音

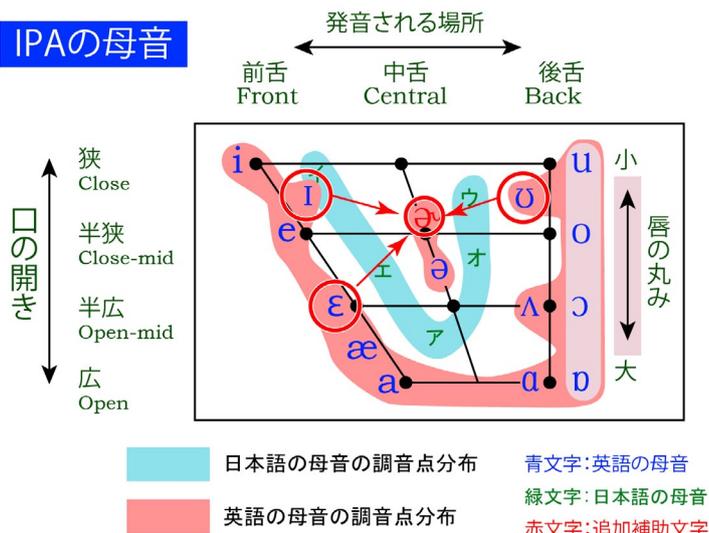
これらの母音は、英式発音で /ɪər/, /ɛər/, /ʊər/ となります。イタリック体の /r/ は、直後に母音と音のリンクを起こすときだけ現れます。

米式発音の /ɪə/, /ɛə/, /ʊə/ を二重母音と見なさず /ɪr/, /ɛr/, /ʊr/ としている辞書もありますが、いずれの表記方法でも表そうとしている音自体は同じものですから、音声学的分類法や記号表記にこだわるよりも、「記号を参考にして音そのものを習得する」ことに重点を置いてください。

発音の要領としては、英米式のどちらでも基

本は同じで、最初の母音をしっかり強く発音した直後に舌の力をふっと緩めればよいのです。そのまま曖昧母音に移ればイギリス式の発音であり、そのとき /r/ を発音する位置に舌を持っていけば米式発音になります。/ɛ/ の記号は重母音の中だけに現れますが、/e/ の発音をするときの左右の唇の引き方をやや弱め顎の開きがわずかに大きくなる程度の違いです。重母音ではあとに続く母音への移行のしやすさの関係で前の母音が多少変位することがありますが、この/ɛə/も同様に、/eə/というつもりで発音しても、前の母音/e/ が「直後に /ə/ や /ɑ/ を発音しようとして」自然に顎の開きがやや大きくなった結果です。辞書によっては /ɛ/ の記号を用いず、/ear/ といった表記により使う記号の種類を減らしているものもあります。米式 /ə/ は英式で /ər/ に対応します。直後の母音とリンクするときだけスペルの r が音として現れますが、母音が続かない場合、r は発音されません。簡略化のためにここでは米式発音のみ示しますが、リンク先のOALDには /ɪə(r)/ と英式も示されています。(括弧に入った/r/ は本書のイタリック体の /r/ と同じ意味です。)

IPAの母音



/ɪə/

ear /ɪə/ 耳
here /hɪə/ ここで
near /nɪə/ 近い
year /jɪə/ 年
rear /rɪə/ 後部

/ɛə/

hair /heə/ 頭髪
pair /peə/ ひと組
rare /reə/ まれな
care /keə/ 世話；注意
wear /weə/ 身につける

※ ear と year の発音に注意。year の頭の子音の発音を脱落させないように。

/ʊə/

cure /kjʊə/ 治癒する
pure /pjʊə/ 純粋な
sure /ʃʊə/ 確かな
tour /tʊə/ 周遊旅行
mature /mətʃʊə/ 成熟した

★三重母音

二重母音の数をいくつと考えるかについては、アメリカ英語での /ə/ の音を母音として考えるか、そこに子音の /r/ があると見なすかによって異なりました。その考え方の違いが、そのまま三重母音の数をいくつと見るかについても当てはまります。

本書では、英米ともに2つの三重母音があると見なして解説しますが、/aɪə/, /aʊə/ の末尾の母音 /ə/ を子音 /r/ に過ぎないと見なせば /aɪr/, /aʊr/ と表記されることとなり、これらは二重母音に含まれますので、「アメリカ英語に三重母音はない」という考え方もあるわけです。

一方イギリス英語では、/aɪər/, /aʊər/ という音の並びとなるため、末尾の /r/ が後に続く母音とリンクしてもしなくても、三重母音であることに変わりはありません。

三重母音でも音の中心は最初の母音です。/a/ の音をまずはっきり明確に発音し、その直後に第2母音を短めに添えてから舌の緊張をふっと抜いてやります。その際舌を /r/ の位置に構えていればアメリカ英語、/r/ の音色を帯びない曖昧母音 /ə/ とすればイギリス英語となるわけです。

すでに述べました通り、二重母音にしても三重母音にしても、「その音のまとまりで1つの母音」だという意識を持って発音することです。2つや3つの母音を並べて発音するのではなく、「1拍(=1音節)の中に収めて発音」する要領が大切です。

/aɪə/

- fire /faɪə/ 火
- wire /waɪə/ 針金
- tire /taɪə/ 疲れさせる

なお、「liar」という語は発音表記として /laɪə/ になりはしますが、これは「lie(嘘をつく)」という動詞に人を表す語尾の -ar(=-erのバリエーション)が接辞されたものなので、li-ar /láɪ.ə/ という2音節語です。従って「二重母音音節+単母音音節」という組み合わせなので、三重母音を含む語とは見なしません。

/aʊə/

- our /aʊə/ 私たちの
- hour /aʊə/ 時間

liarが「li-ar」の2音節であり、三重母音で1音節になっているのではないのと同様、以下の例も2音節に分かれていますので、/aʊ.ə/ という音の並びではあっても三重母音ではありません。通常は発音記号の表記の中で音節の切れ目を示すことはしませんが、ここでは便宜上「.」でそれを示します。(そこで音を切るという意味ではありません)

- | | | |
|------------------|----------|-----|
| flower (flow-er) | /fláʊ.ə/ | 花 |
| power (pow-er) | /páʊ.ə/ | 力 |
| tower (tow-er) | /táʊ.ə/ | 塔 |
| coward (cow-ard) | /káʊ.əd/ | 臆病者 |

★英語の子音

ここからは英語の子音の解説・練習に入ります。

母音は音節の要となり、「聞こえ(Audibility)」を支えますが、子音は原則として単独で音節を構成できません。子音は母音の前あるいは後に吸着することで母音によってその聞こえの明確さを与られます。例外的に「子音音節」というものもあるのですが、これも厳密には「曖昧母音」が発音されているか、子音の中でも半母音的性質を帯びているため音節となりうる例外的なものです。子音音節についてはまた別途解説します。

英語の母音が厳密には1つも日本語と完全に共通したものがないと述べました通り、子音についても日本語とまったく同じものはありません。日本語の子音で代用しても支障のないものもありますが、そもそも日本語に近似音さえない子音もありますので、そういうものは音の出し方から覚えなければなりませんし、一見日本語の子音で代用が聞きそうな「h」や「t」などでさえ英語特有の音の出し方があります。

日本語の五十音は歴史的な経緯もあって、かなり変則的な音の並びになっています。たとえば「さ行」では「sa, SHI, su, se, so」と「s行」に「SH行」が混じっていますし、「タ行」も「ta, CHI, TSU, te, to」と共通の子音とはなっていません。

ですから、英語の子音を学ぶときにも日本語の五十音やローマ字を参考にしないようにしましょう。英語の音として独自に学ぶ構えを持ってください。

★有声音と無声音

英語の子音の習得を効率的に進めるためには「有声音」と「無声音」について理解しておくといでしょう。なぜならば、多くの子音は「まったく同じ音の出し方」で声によってその音を出すか、息によって出すかだけの違いとして音声学的なペアをなしているからです。

すべての子音についてそのような有声音・無声音のペアがあるわけではありませんが、ペアとなっているものだけで16子音、すなわち8組あります。

すべての音素は、肺から送り出された呼気が、喉、口腔(口の中の空間)、歯、唇、または鼻腔(鼻の奥の空間)、鼻の穴という経路をたどって外に出ることで発生しますが、喉を通過するときに「声帯の振動」を伴うか伴わないかによって「有声音」と「無声音」に分かれます。

確認方法は簡単で、手を喉に当てながら何かの音を出してみ、手に喉の振動を感じれば有声音、感じなければ無声音です。声を出さずにゆっくりと息だけを吐いたり吸ったりしてみてください。喉に当てた手には特に振動は感じられませんね。これは声帯が振動していないからです。次に「あー」と声を出してみると手にははっきりと振動が感じられます。これが声帯の振動です。声帯は口の中を覗き込んでも見えない位置にありますが、その振動はこのようにして確認することができます。

ちなみに日本語には「濁音」という言葉がありますが、これは音声学の用語ではなく「仮名で表記したとき濁点(゜)をつける」という表記上の形式についての名称です。濁音はすべて有声音ですが、有声音のすべてが濁音ではありません。たとえば母音は全部有声音ですが、「あ」に濁音をつけるのは漫画のセリフの中だけです。

また「は」、「ぱ」、「ば」は同じ「は」をベースにして右上に「半濁点(゜)」や「濁点(゜)」をつけて区別しますが、これはなんら音声学的な対応になっていません。つまり日本語でいう「濁音」はなんら「にごった音」ではなく、無声音を有聲化させたものでもありませんし、「半濁音」にいたっては「半分にごった音

など音声学的はまったく存在しません。英語とは直接関係ありませんが、日本語の「濁音、半濁音」はまったく「音の性質」を現す言葉でないということは知っておきましょう。

どんな音でも「ひそひそ声」で話すときは無声音になってしまいます。これは声帯を振動させないように発音することで「声をひそめている」からです。発音練習においては、このような「かすれ声」は含まれません。

英語では8組の「有声音・無声音」のペアとなる子音があると述べましたが、ペアをなしていない子音はすべて有声音で、無声音しかない子音というものはありません。

技能の習得を主要目的とする意味においては、音声学の用語を覚える必要はないのですが、「有声音」と「無声音」という言葉は、文法的な説明にも用いられますので、覚えておいた方がよいでしょう。

たとえば名詞の複数形語尾 -s をどう発音するかをルールとして暗記した人もいるかと思います。

「pen」の複数形「pens」では「-s」が / z / と発音されるのに対して、「book」の複数形「books」では「-s」を / s / と発音しますね。これは「人が決めたルール」なのではなく、複数形語尾の「-s」の直前の音の出し方をそのまま続けた結果に過ぎません。つまり、pen という単語の末尾は n であり、これは有声音です。一方、book の語尾 k は無声音。複数語尾のスペル s を / z/s / のいずれで読むかは、直前の声帯の振動状態をそのまま維持するのが「発音しやすい」ため、無声音で終わっている単語についた -s はそのまま無声音として、有声音語尾の単語についた -s は声帯の振動をそのまま保って有声音 / z / の発音がなされるわけです。早い話が「そう発音した方が読みやすい」というだけの理由なのです。

さて、有声音と無声音の違いが理解できたら、いよいよ具体的な英語の子音について学んでいくことにしましょう。

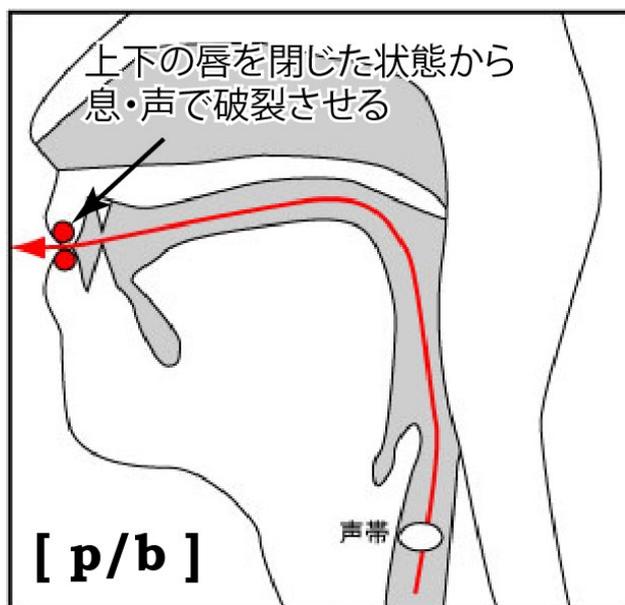
★子音 / p /, / b /

日本語にも「ぱびぷべぽ」、「ばびぶべぼ」の音はありますので、その子音でよいのではないかと思うでしょう。確かに日本語の「ぱ行、ば行」の子音でそのまま代用しても支障は来たしません。ほとんどそれで通じます。「ほとんど」と言ったのは、まれにうまく伝わらないことがあるということでもあります。

/ p / と / b / は同じ発音要領で、無声音か有声音かの違いなのですが、もう少し細かく見ていきますと、同じ / p / であっても単語のどの位置に現れるかで微妙に発音要領が異なります。

/ p /、/ b / とともに上下の唇を閉じた状態のまま、吐き出す息によって口の中の圧力が上がり、それが閉じた唇の間を破るようにして一瞬だけ発せられる音です。このようなタイプの音を「破裂音」といい、息だけで上下の唇の閉鎖を破れば無声音、声を伴えば有声音です。

日本人でも日ごろから「ぱ行、ば行」の音を使っていますので、今更このようにあえて言葉にして、それらの音が作り出されるメカニズムを説明されるまでもないと感じるかも知れませんが、日本語の「ぱ行」子音は、「破裂が弱い」傾向にあります。口の前に手のひらを置いて、「ぱびぷべぽ」と普通に日本語で言って見てください。かすかに手のひらに息がかかるでしょうが、その勢いはあまり強くありません。口の前にティッシュペーパーを垂らした状態で発音してみても、それほど大きくティッシュは動きません。これが一般的な日本語における「ぱ行」子音なのです。



それに対して英語の / p / 音は、日本語よりもずっと強い圧力で破裂を起こします。英語話者が同じことを行いますと、口元の前に垂らしたティッシュは / p / の発音とともに大きくはじかれ、吹き飛ばされます。英語の無声音はどれも日本語よりも強い息の圧力を用いるという点を念頭に置いてください。これを心がけるだけでもあなたの発音はぐっと英語本来の音になってきます。前に英語と日本語の違いは「発音」だけでなく「発声」にも由来した印象差があると少し述べましたが、これは民族の平均的な呼吸法の習慣の違いによります。日本人は胸式呼吸をする傾向が強いのに対して、欧米では腹式呼吸を習慣的に用いている民族が多いと言われています。そういう呼吸法の差が、呼気の強さにも現れます。

極めて基礎的な英単語である pet を英語話者に bed に聞き間違えられてしまったという経験を持つ人がいます。日本人の耳にはまるで違う音なのですが、日本人が pet と「日本語の呼吸法」によって発音しますと、/ p / での破裂が弱すぎるため、有声音の / b / に似た聴覚的印象を与えることがあります。/ t / を / d / に聞き間違えられるのも同じ理由によります。

ですから / p / で始まる単語を発音するときは、口の前に手を置いて、息が強くかかる感触が得られるようにしてみてください。そういう強い息で破裂した / p / 音を習慣的に使えるようになれば、紛れのないクリアな音に聞こえます。

それでは / p / 音で始まる単語を実際に発音してみましょう。意識的に強い息で破裂を起こすように練習してください。

/ p / で始まる単語の例 :

- pet ペット / pét /
- pit 落とし穴 / pít /
- put 置く / pót /
- pick 突く / pík /
- pocket ポケット (Am)/ pá:k-it / (Br)/pók-it /
- push 押す / pús /

ところで、同じ / p / 音なのに、音節末尾に現れるときはこれまでと違って、破裂が非常に弱くなるか、まったく破裂しない音となることがあります。たとえば「top」という単語の発音では、末尾の「p」の発音要領として、上下の唇を閉じただけで破裂をまったく起こさなくてもよいのです。つまり上下の唇を閉じて突然音を止める感じです。

「強い破裂を伴う p」と「まったく破裂を伴わない p」ではずいぶん印象さが違うようにも思えますが、英語話者の耳には、「同じ p の音」と受け取られています。ただ「現れる位置が違うことで自然と発音要領が異なっている」というだけなのです。このように「実は発音の仕方が異なっているのに、その言語の話者にとっては同じ音の範囲内に受け取られている複数種類の音」のことを「異音(allophone)」といいます。

日本語にもこの異音は多く観察されます。本当は質の違う音なのにカタカナで同じ文字を当ててしまう hat, hut, hot の母音などは日本人にとっては「あ」の範囲内と聞こえているわけですね。

英語の p の音も音節の最初にあるときと、末尾にあるときでは破裂の強さに無意識の違いがありますが、その違いを「別の音」とまでは認識していないため、同じ文字で表記し、同じ発音記号で表しています。

しかし破裂の際の息の強さの違いを厳密に表す記号として [p^h] と [p⁻] が用いられることがあります。一般の英和辞典などではそこまで区別して表記されませんが、音声学的な解説において破裂の強さの違いを書き表す際は、この 2 つの記号で音の質の差を表現します。本書では一般の辞書にならい、同じ / p / の記号でどちらの場合も表すこととしますが、練習の際は区別してみてください。

それでは / p / 音が音節末尾に来て、破裂を伴わない例についても練習しましょう。直前まで出ていた音を上下の唇の閉鎖で突然止める要領で発音します。なお、音節末尾であっても破裂させていけないわけではありません。相手にはっきりと言葉を伝えたいときなど破裂までしないと聞き取りにくいことがあります。それでも音節の頭にくる場合に比べて破裂が弱い傾向にあります。

なおオンライン辞書の発音サンプルは「はっきり発音する」ことを念頭に録音されており、末尾の /p/ や /t/ などもしっかり破裂させていることが多くあります。常に破裂させて読んでももちろん間違いではありません。

音節末尾に / p / が来る例 :

- keep 保つ / kí:p /
- top 頂上 (Am)/ ta'p / (Br)/ tóp /
- soup スープ / sú:p /
- soap 石鹸 / sóʊp /

- shop 店 (Am)/ ʃáp / (Br)/ ʃóp /
- sheep 羊 / ʃí:p /

有声音の / b / は、音節の最初でも末尾でも破裂を起こしますが、やはり末尾の場合では破裂が弱まる傾向にあります。

(1) / b / が音節最初に来る例 :

- bed ベッド / béd /
- bell 鐘 / bél /
- boat ボート / bóut /

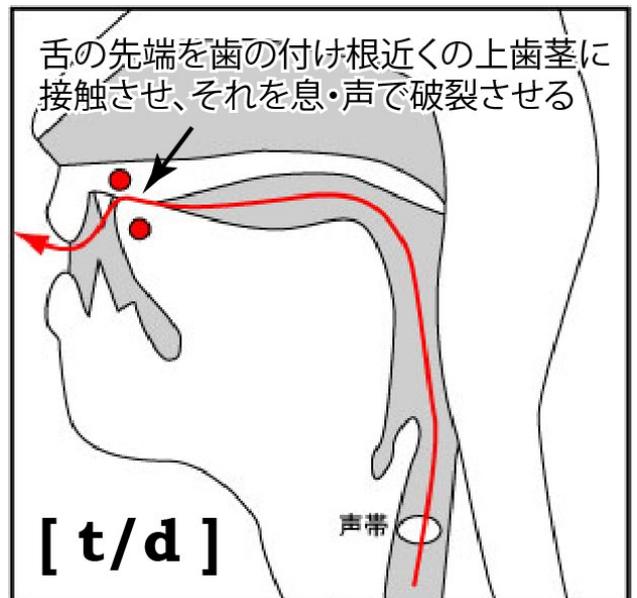
(2) / b / が音節末尾に来る例 :

- rob 強奪する (Am)/ rá:b / (Br)/ rób /
- sob すすり泣く (Am)/ sá:b / (Br)/ sób /
- knob ドアの握り (Am)/ ná:b / (Br)/ nób /

★子音 / t /, / d /

これも日本語の「た、だ」の子音で置き換えても基本的に通じる範囲内ですが、先の / p / b / 同様、息の強さが日本語と違うため、日本語感覚での / t / 音は英語話者の耳に / d / と紛らわしく聞こえることがあるようです。有声音というのは声帯の振動がある分だけ、聞こえの強さを感じやすいのですが、無声音は声帯が振動していないため、強い息による破裂の強さで聴覚的な印象を強めるしかないわけです。

/ t / が単語の最初に現れるときはやはり強い破裂を起こしますので、それを特に [tʰ] という記号で表現することができます。この右肩に添えられている小さな h は / t / の音の直後に息が強く吹き出していることを意味します。/ p / 音で練習したときのように口の前に手のひらをかざし破裂直後の強い息を確認してください。あるいはティッシュを垂らしそれが / t / を発音した直後に勢いよくはじかれるように発音するとよいでしょう。



/ t / 音が単語の最初に来る例 :

- tip 先端 / típ /
- ten 10 / tén /
- top 頂上 (Am)/ tá:p / (Br)/ tóp /
- trip 旅 / tríp /

最後の「trip」では / t / のあとにすぐ / r / というもう 1 つの子音が「間に母音を挟まずに」続きます。これは、r のない tip を数回繰り返してみ、その後同じリズムの中で trip を発音してみると余計な母音をはさまずに発音しやすくなるでしょう。上記例がすべて同じ 1 音節であることに注意してください。

/ t / が音節末尾に来る場合、/ p / と同様に破裂を起こさず、舌尖を上歯茎、歯の付け根あたりに押し付けた瞬間に発音を終了させます。(この音を [t̚] に対して [t̚̚] と小さなマイナス符号を右肩に添えて表すこともあります。) そのとき舌尖を歯茎から離して破裂させてももちろん正しい / t / の音ですが、無破裂の / t / は日本人の耳に聞き取りにくいので、練習しておく必要があります。

/ t / が音節末尾に来て破裂を起こさない例 :

- hot 熱い (Am)/ há:t / (Br)/ hót /
- pot つぼ (Am)/ pá:t / (Br)/ pót /
- not ~でない (Am)/ ná:t / (Br)/ nót /
- cut 切る / kát /
- meet 出会う / mí:t /
- mitt (指なし)手袋 / mít /
- met meetの過去形 / mét /

無声音 / t / に対する有声音が / d / です。これは数ある英語の子音の中でも日本語の「だ、で、ど」の子音とほぼ同じなのでその感覚で置き換えても構いませんが、単語の頭にある場合は、日本語よりも息を強く出す気持ちで発音してください。

/ d / が単語の最初に来る例 :

- do する / dú: /
- done doの過去分詞 / dʌn /
- dive 飛び込む / dáiv /
- drive 運転する / dráiv /
- deal 分ける / dí:l /

/ d / が音節末尾に来るときは有声音なので、声帯の振動を意識的に維持してください。そうしないと / t / と聞き間違えられます。ただし末尾に「ない母音」をつけてしまわないように。

/ d / が音節末尾に来る場合の例 :

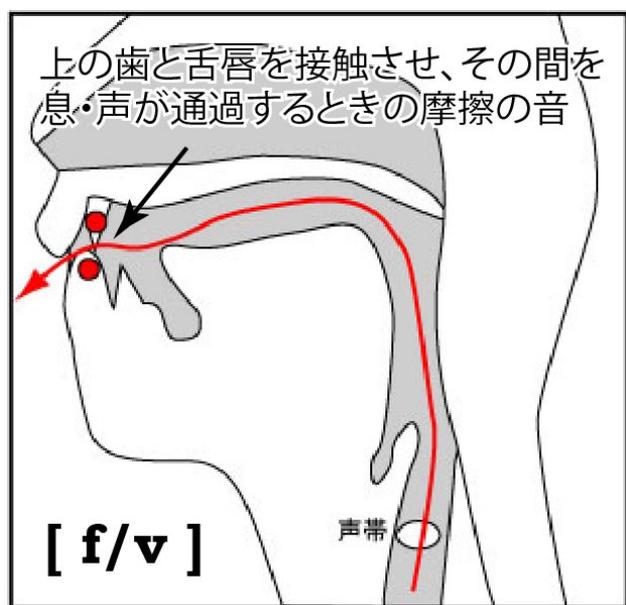
- bad 悪い / báed /
- glad 嬉しい / gláed /
- bed ベッド / béd /
- had haveの過去形、過去分詞形 / háed /
- hold 握る / hóuld /

★子音 / f /, / v /

日本語の音では代用が利かない音の1つです。ヘボン式ローマ字にも f の文字は使われており、「フ」を「fu」と表記しますが、日本語の「フ」の子音は英語にない音であり、唇を小さく丸めてその狭い隙間を息が通過するときの摩擦の音です。ローソクを吹き消すときの「フッ」という音が日本語の「f」ですが、英語の「f」は上の歯と下の唇を接触させ、その隙間から息が出るときの摩擦音です。

日本語では「歯」を用いる発音がありません。また「v」の文字は「ヴ」という仮名表記でそれを表そうとする工夫もありますが、現実として日本人は「ヴ」と「ブ」を発音として区別しませんので、「b」の音で代用してしまっています。「v」は「f」に対する有声音ですから、やはり上の歯と下の唇が接触した状態で、声によって摩擦を生じるときの音です。摩擦音というのは息や声が出ている間、継続的にその音を保つことができます。一方「b」はすでに学習したとおり「破裂音」ですから一瞬しかその音を出すことができません。英語話者の耳にはまったく異質な音として把握されますので、英語の「f」を日本語の「フの子音」、「v」を「b」で置き換えることはできません。

どこの国の人でも、自分が日常的に母国語に用いている音に基づく「音韻体系」というものを持っています。簡単にいうと「耳に慣れた音のまとまり」です。聞きなれない音や、自然界の音などは、「自分が出せる音」の何かで無意識に置き換えてそれを聞き取ろうとします。ですから、日本語にない英語独特の発音を耳にすると、日本語にある何かの音でそれを代用してしまうわけです。これが母国語の発音習慣から脱却できていないということです。そこから脱却するためには、英語本来の音の出し方を学び、「自分でも出せる音」のレパートリーを拡大する必要があります。発音練習を重ねて、「新しい音」に慣れることで、その音を耳にしたとき日本語の音での置き換えをしなくなります。耳だけに頼っていくら沢山の英語音を聞いても英語の発音がなかなか上達しないのは、このように「英語の音の出し方」を身につけないでいくら耳を傾けても無意識に日本語の音への置き換えを行い続けてしまうからです。



さて / v / の発音の要領ですが、下顎を少し引き加減にして上の歯が下唇の内側か真上辺りに接触する形を作ります。「唇をかむ」ほど極端な形を作る必要はありません。下唇に上の歯の接触を感じたら、そのまましばらく息を出して摩擦による音がでることを確認してください。その音は息を出し続ける限り継続的に出すことができます。この「音の継続性」が摩擦音の特徴です。まったく同じ形で声を出せば有声音 / v / となります。

では無声音 / f / で始まる単語の例を練習しましょう。特に注意していただきたいポイントとしては、 / f / の音が自分自身の耳にはっきり入ってくるまで、その音を長めに出してから次の母音に移行することです。摩擦の時間を長めに持つように心がけると破裂音との区別のはっきりした明確で聞き取りやすい音が出せます。

/ f /で始まる単語の例：

- feel 感じる / fi:l /
- fit 適合する / fit /
- fish 魚 / fiʃ /
- fight 戦う / fáit /
- foul 汚れた / fául /
- fine 立派な / fáin /
- find 見つける / fáind /

次に有声音 / v / の練習です。 / f / と同様に摩擦の時間を長めに持って、自分の耳に / v / がはっきり聞こえてきてから次の母音を発音するように心がけてください。

/ v / を含む単語の例：

- vine (植物の)つる / váin /
- vest チョッキ / vést /
- vast 広大な (Am)/ væst / (Br)/ vá:st /
- view 眺める / vju: /
- vivid 鮮やかな / vív-íd /
- visit 訪問する / víz-it /
- violin バイオリン / vài-ə-lín /

注意：

- (1) vivid, visit の2語の音節に注意しましょう。viv, visまでをまず一気に発音し、それを「-id, -it」を追いかける感じです。vivの末尾の / v /、visの末尾の / z / の摩擦音を保ちながら第2音節を発音しますので、/ vív-(v)it /、/ víz-(z)it / のように第2音節の頭にも直前の母音が発音されることになります。適切な音節感覚を身につけるためにも、最初のうちはゆっくり発音することを忘れないでください。
- (2) violinは「vi-o-lin」という3音節から成り立つ語で、英語ではとても長い単語という感覚があります。発音記号を見ると / vài-ə-lín / と第1音節には左上がりの、第3音節には右上がりのアクセント符号がついています。右上がりのアクセントが「第1アクセント(主要アクセント)」で最も強く発音される箇所、左上がりが第2アクセント(副次アクセント)」でそれに次いで強く発音されます。(アメリカ英語では第1アクセントと第2アクセントの強さの差がほとんどない傾向もあります。)第2音節は「両側のアクセントの間に挟まれた音の谷間」のような存在のため、母音「o」が非常に弱まった結果、曖昧母音 / ə / になっていることが分かりますね。

それでは次に / f /、/ v / で終わる単語の発音も練習します。末尾に余分な母音を添えないこと、末尾の摩擦音を長めに保つ気持ちを忘れないように練習してください。(米英発音はコンマで切って併記)

/ f / v / で終わる単語の例 :

- roof 屋根 / rú:f /
- wife 妻 / wáif /
- knife ナイフ / náif /
- cough 咳 / kó:f , kóf /
- rough 粗い / ráf /
- tough 丈夫な / táf /
- enough 十分な / ɪ-náf /

- have 持っている / háev /
- love 愛する / láv /
- dove ハト / dáv /
- wives wife(妻)の複数形 / wáivz /
- knives knife(ナイフ)の複数形 / náivz /
- curve 曲がり、カーブ / ká:vz , ká:v /
- carve 彫刻する / ká:rv , ká:v/

注意:

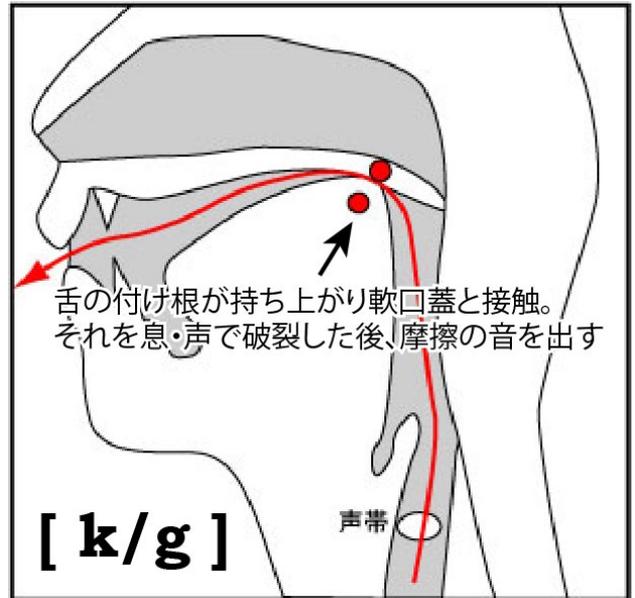
- (1) wife, knifeの複数形 wives, knives で / v / と / z / の間、あるいは末尾に余分な母音を発音しないように。
- (2) curve, carveの母音の違いにも十分注意してください。自分が日本語の発音習慣から十分脱却していることを確認しましょう。



★子音 / k /, / g /

「原則的に英語の音素で日本語と全く共通のものはない」と申し上げてきましたが、今回の / k/g / のペアについては、日本語の「か行/が行」子音と同じと言って構わないでしょう。唯一の違いを言うとしたら、やはり「呼気の強さ」の差で、日本語よりも強い息で発音されるという点です。

この / k/g / がどのように発音されているかと言えば、舌の付け根部分が高く持ち上がり、軟口蓋という上顎の奥の手で触れてみてやわらかい部分と一旦接触し、その隙間を息や声を通り抜けるときの摩擦の音です。「一旦閉じた部分を破裂させ、そのまま摩擦を起こす」ことからこの種の音を「破擦音」と呼びます。



/ k/g / を含む単語の発音練習 :

- cool 涼しい / kú:l /
- kite 凧(たこ) / káit /
- kick 蹴る / kík /
- cute かわいい / kjú:t /
- get 得る / gét /
- good よい / gú:d /
- ground 地面 / gráund /
- hug 抱きしめる / hág /
- leg 脚、すね / lé:g /

注意:

- (1) 上記例の中で「ground」という単語は外来語としてカタカナ表記すれば「グラウンド」ですが、英単語では1音節語です。日本語の「グラウンド(gu-ra-u-n-do)」は5音節で発音していますので、音的には5倍もの違いがあると言えるのです。まず最初に / aʊ / という2重母音(これで一拍)だけを数回繰り返してみ、そこに / gr-/と / -nd / という2重子音を余計な母音を追加しないように注意して加えてみてください。
- (2) / gr- / では / g / を発音しようとするとき、すでに舌は / r / の音を発音する準備位置に置かれます。そうすることで2つの子音の間に不要な母音が入りにくくなります。

★子音 / s /, / z /

これらもごく簡単な子音に感じられると思いますが、日本語の習慣に慣れてしまうと、このあたりから「本来区別されなければならない音」が無意識に混同されている例について少し触れなければなりません。

「じ」と「ぢ」は同じ音ですか？

「ず」と「づ」ではどうでしょうか？

日本の小学校では生徒にこれらは文字は違うけれど同じ音だと説明されていると思います。しかし、次の例を慎重に読み比べてみてください。

「しじみ」と「ちぢみ」

「すずり」と「つづり」

どうでしょうか？「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」を同じ発音にしていましたか？ゆっくりと自分の口の中の舌の動きを自覚しながらもう一度読み直して確認してみてください。

「しじみ」では「し」という音の直後に「じ」が現れるため、shi-ji-miは、/ ʃi-zi-mi /と発音しています。

し(shi /ʃi/)の音は舌の前部が上顎に接近しながらも舌はどこも上顎に触れません。それと同じ発音の要領を繰り返しつつ、ji/ zi / は有声音にして発音しています。

ところが、「ちぢみ」という音の並びで発音したときは、ち(chi /tʃi/)で舌の先端が上歯茎に触れるため、その要領を繰り返しつつ有声音を発しようとして「ぢ/ dʒ /」でも舌先が上歯茎に触れます。

「すずり」では、「す(su)」の発音で舌先がどこにも触れないので、それに続く「ず(zu)」も舌先をどこにも触れさせない要領で発音しますが、「つづり」では「つ(tsu)」で舌先を上顎に触れさせるため、その反復の要領での有声音「づ(dzu /dʒu/)」が発音されているのです。

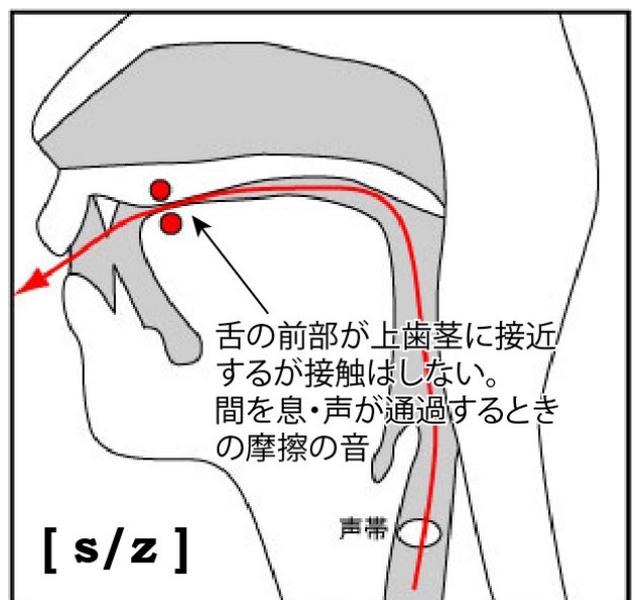
これらは「音の並び」による無意識の発音区別なのです。

さて英語の発音/s/は、「さ、せ、す、そ」の子音ですが、「し」の子音ではありません。

/s/を発音しようとするとき、図のように舌の前の部分が持ち上がり、上顎との隙間を狭めて、その間を息が通過する摩擦の音が発せられます。ほぼ同じ要領で舌のもう少しだけ中央よりの部分を上顎に接近させると「しゃ、しゅ、しょ」の子音sh /ʃ/に変化します。どちらの音も舌は上歯茎に触れません。

繰り返しますが/s/の音を出すとき「舌は上顎に触れません」。これをよく自覚してください。

ということは、/s/の有声音である/z/を発音するときも、舌先が上顎に触れてはいけなわけです。/s/z/は摩擦音ですから音の継続性があります。/s/をしばらくならして見て、そのまま息を声に切り替えると/z/音に変わります。舌先が上顎に触れていないことを確認してください。



では「zoo(動物園)」という単語を発音してください。

これを「日本語の『ズー』」で読んでみると /dzu:/ というふうに舌先が一瞬上顎に触れてしまっていま

す。それでは正確に zoo を読んだことになりません。まず「スー」と何回か繰り返してみ、舌先を上顎に触れさせず / su: / という発音をした直後に / s / を有声音の / z / に切り替えてみるとうまくいくでしょう。

日本人が普通に「ズー」と言うと実は「ヅー / dzu: /」という発音をしてしまっているのです。中学 1 年で習うような zoo という単語を今まで正確に発音してきましたでしょうか？

発音を練習する際の心がけとして「気持ちを白紙にして」と申し上げた意味が理解できましたでしょうか。私たちが何気なく発音している日本語の音は非常に変則的・不規則な配列になっており、その感覚のまま英語の音を出してしまいますと、できているつもりで「別の音」を出していることが多いものなのです。

/ s / の音を含む単語の練習 :

- see 見る / sí: /
- sit 座る / sí:t /
- suit 適合する / sú:t /
- south 南 / sáʊθ /
- say 言う / séi /
- mess 散らかす / mé:s /
- loss 損失 / ló:s , lós /
- loose ほどけた / lú:s /

/ z / の音を含む単語の練習 :

- zoo 動物園 / zú: /
- zone 区域 / zóʊn /
- zinc 亜鉛 / zíŋk /
- because なぜならば...だから / bɪ-kó:z, bɪ-kóz /
- lose 失う / lú:z /
- buzzer ブザー / báz-ə , báz-ər /

いかがですか？今度は / dz / の音にしないでちゃんと / z / として読めましたでしょうか？難しいと感じたら、最初に / s / で読んで見て、そのあとすぐ / z / にしてみるとよいでしょう。zoo をわざと数回 / su: / と繰り返したあとで / zu: / といい、zone なら / sóʊn / を繰り返してから / zóʊn / と発音してみるのです。

よく日本人の英語の発音といえば「LとRの区別」が難しいとか言われますが、それはすぐ覚えられます。誰もが指摘するので問題意識もありますが、今回の / z / の音のように「それが実は日本人にとって難しい(気づかずに違う音で置き換えている)」ことがあまり指摘されない発音の方がよほど注意が必要なのです。

★子音 /ʃ /, /ʒ /

一般のアルファベットにはない特殊な記号ですが、/ʃ/ はローマ字的には sh で表される音。発音記号として sh をそのまま用いないのは、決して「s→h」という2つの音を連続的に出した結果の音ではなく、1ステップで発生される音だからでしょうか。

/ʃ/ の記号は s を縦に引き伸ばしたような形をしており、音的にも /s/ に近いと言えます。

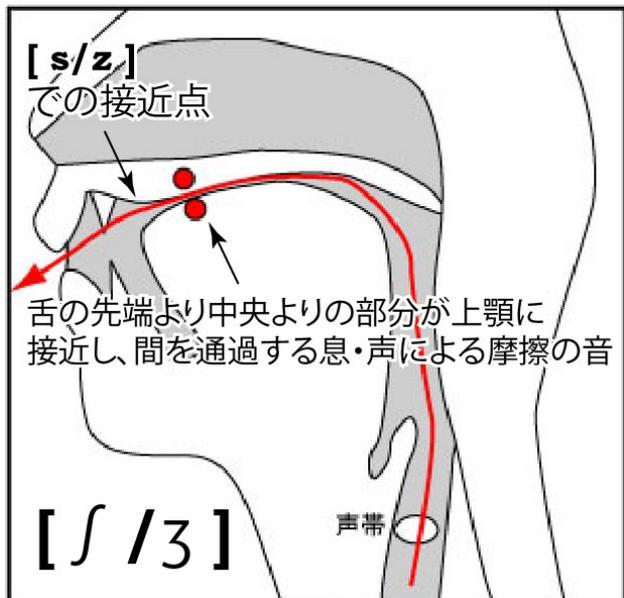
同様に /ʒ/ の記号は /s/ の有声音 /z/ の下の横棒を引き伸ばして丸めたような形になっており、/s/, /z/ が無声音・有声音の対応になっているように、/ʃ/ と /ʒ/ も同じ発音要領の無声音と有声音です。

無声音 /ʃ/ の発音要領は、/s/ に似ていますが、/s/ よりももっと下の中央に近い部分が上歯茎に接近します。接近はしますが決して「接触しない」点に注意してください。日本語で「しゃ、しゅ、しょ」とゆっくり発音してみてください、舌の面が上歯茎に触れていないことを確認しましょう。

/ʃ/ に対応する有声音 /ʒ/ は通常日本語には用いられません、まれに前後の音の並びの関係で「じ」がその発音に変異することがあります(例:「しじみ」)。

英語では頻繁に /ʒ/ も現れますので、television や pleasure、massage をテレビジョン、プレジャー、マッサージとカタカナ風に読んでしまうと /ʒ/ であるべき箇所が /dʒ/ と発音されてしまうため、注意が必要です。

/ʃ/ で舌面が上顎に触れないように /ʒ/ の発音でも舌は上顎に触れてはいけません。/ʒ/ 単独での発音を練習するには、まず日本人にも簡単に発音できる sh /ʃ/ の音を継続的に出してみ、そのまま息を声に変えるとよいでしょう。



/ʃ/ の音を含む単語の練習 :

- shoe 靴 / ʃú: /
- shut 閉じる / ʃʌt /
- she 彼女 / ʃi: /
- push 押す / pʊʃ /
- wish 願望する / wɪʃ /

次に /ʒ/ を含む例です。あくまでも /ʃ/ に対応する有声音であることを念頭に、舌面を上歯茎に接触させないように注意してください。

/ʒ/ の音を含む単語の練習 :

- pleas•ure 楽しみ、喜び / pléʒ-ə, pléʒ-ər /
- con•fu•sion 混乱、混同 / kən-fjú:-ʒn /
- tel•e•vi•sion テレビ / tél-ə-vi-ʒn /
- mas•sa•ge マッサージ / məs-á:ʒ, məés-a:ʒ /

注意:

- (1) kitchen は 2 音節語ですが、1 音節目で「kit-」までを発音し、舌尖を上歯茎につけて /j/ 音を出す構えまでを作り、2 音節目の「-en」を発音するときにはじめて ch /tʃ/ 音が現れる要領となります。つまり実際に音として /tʃ/ が聞こえてくるのは 2 音節目が発音された時点ですが、音節の区切りとしてはあくまでも第 1 音節のアクセントのある母音に前後から子音が吸着するため kitch-en となります。(簡単に言えば「キッ-チン」でよいのであり、これを「キッチ-ン」と読むのではないということです。)
- (2) 「jeep」は本来、クライスラー(Chrysler)という会社の製品で固有名詞ですから「Jeep」と大文字で書くべきなのですが、この車種が一般的な「小型四輪駆動車」の意味で普通名詞的にも用いられていますのでここでは小文字にしています。

ちなみにフィリピンには、アメリカ軍が占領後に残していった多くの軍用ジープを乗り合いタクシーとして改造した「jeepney(ジープニー)」という公共交通機関があります。これは「jeep」と「jitney(小型の乗り合いバス)」を合成した人造語です。もともと質素だった軍用車を思い思いに派手な塗装をして、庶民の足となっています。



★子音 / θ /, / ð /

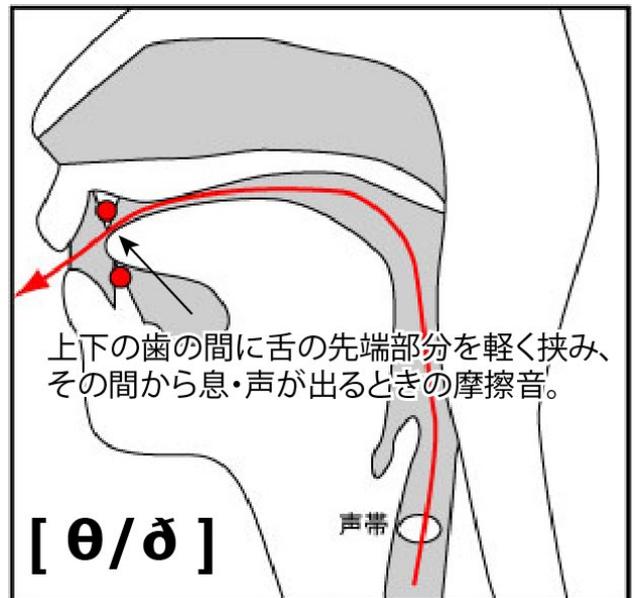
この音は日本語にはまったく近似音さえない英語特有の音ですが、この音を含む the は英語で最も使用頻度の高い単語であり、これが正しく発音できず「ザ」や「ジ」で代用していると常に相手に「強い日本語訛り」によるストレスを与え続けることとなります。是非、しっかりと習得してください。

この発音は単語のスペルに「th」を含むのが特徴で、舌の先端を上下の歯の間に軽く挟んだ状態を作り、歯と舌の間に息・声を通させる摩擦音です。しかし実際には、舌の先端を歯の間からわずかに出しながら、同時に舌の先端に近い面を上歯から歯茎にかけて接触させるため、一旦息や声がせきとめられ、/ t/d / に似た聴覚的印象を与えることがあります。

実際、この th を上手に発音できない英語話者もいて、俗語では / t/d / 音で代用している例もよく見かけます。またそういう俗語的な発音を文字にまで表し、「the」が本来のスペルであるところを「da」と書いてあるものを見ることさえあります。もちろん、これは正式な英語ではないのですが、日本人が / θ / ð / の音を / s/z / で代用し、three を「スリー」、that を「ザット」と発音してしまうよりはずっと英語として通じやすいものなのです。

数字の「3」を日本語風に「スリー」ということに比べれば「tree(木)」の発音でそのまま代用した方が通じますが、適切に上下の歯の間に舌先をはさみさえすれば /θ/ð/ の音を出すのはなんら難しいことではありません。

この発音が苦手だと感じる人は、「口から舌を(少しですが)出す」ことへの抵抗をなくすこと(それが正しい音になるのですから)と、「舌を出した状態で発音」するというより「上下の歯の間に挟んだ下を『抜くとき』に出る音」ということを理解してください。



無声音 / θ / を含む語の練習：

- thick 厚い;太い / θík /
- three 三 / θrí: /
- thief 泥棒 / θí:f /
- path 通り道 / páeθ/ pá:θ/
- month 一ヶ月 / mánθ/
- fourth 第4 / fó:rθ , fó:θ/
- cloth 布 / kló:θ , klóθ /

注意：

- (1) monthの複数形は「months」で、ただ -s を添えるだけです。/ -θs / という語尾は発音しにくく感じるかも知れませんが、「hit-hits」のような組み合わせが簡単に発音できるように、/ -θs / もただ舌先を歯の間に一旦挟んでそれを引き抜きながら「ツ」と言えばよいのです。
- (2) 「cloth(布)」の複数形「cloths」は / kló(:)θs/kló(:)ðz / 両方の発音が認められています。

語尾が「-ths / θs /」の発音になる例も練習しましょう：

- months monthの複数形 / mánθs/
- paths pathの複数形 / pá:θs , pá:θs/
- three-fourths 4分の3(4分の1が3つ) / θrì: fò:rθs /
- cloths cloth(布)の複数形 / kló(:)θs / kló(:)ðz /

有声音 / ð / を含む語の練習：

- that あれ;それ / ðæt /
- then それから;そのとき / ðén /
- those あれら / ðóuz /
- smooth なめらかな / smú:ð /
- mother 母 / málð-ə , málð-ər /
- father 父 / fá:-ðə , fá:-ðər /
- clothe 着せる / klóuð /

注意：

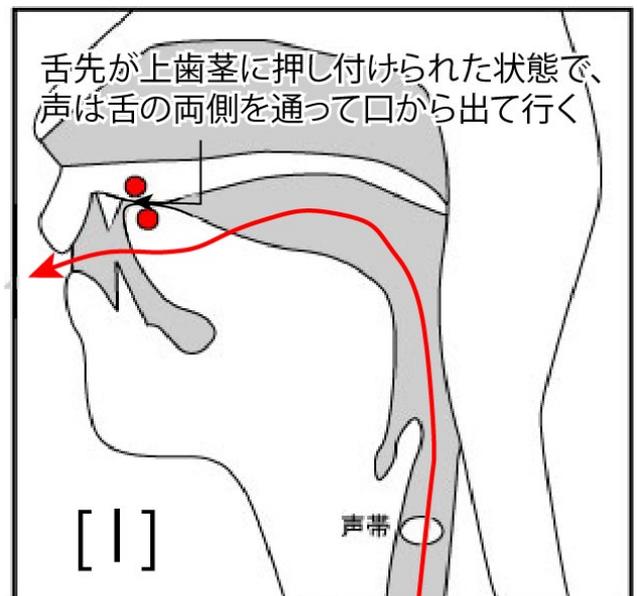
「cloth(布)」の複数は「cloths」ですが、「clothes」と書くと「衣服」の意味。clothes は close と全く同じ / klóuz / と発音して構いません。つまりthを無視した発音でよいのです。/ klóuðz / と発音することも間違っていないですが、むしろ使用頻度はあまり高くありません。

★子音 / l /

これまでは「無声音と有声音」がペアになった子音について学んできましたが、ここからは有声音だけで対応する無声音のない子音を学びます。

英語の発音と言えはよく「日本人はRが下手だ」と言われます。しかし、よく考えてみてください。それならなぜローマ字の「ら行」にはLではなくRが使われているのでしょうか？

よく「Rは舌をどこにもつけないで発音する。日本語の『ら行』は舌先を上歯茎につけるからLだ」という誤解を耳にしますが、日本語の「ら行」子音は、英語のLでもRでもないのです。しかし英語には日本語の「ら行子音」を表す文字がないため、「どちらかと言えばより近いと言える」Rでそれを表すことにしたのです。ということは、



日本語の「ら行」子音は、英語のLからもっと離れているということですね。つまり英語のRを習得する以上にLの習得には注意が必要で練習を要するとも言えるのです。

日本語の「ら行」子音は舌先が上歯茎に接触しますが、それはLのように強い力で舌の先端を歯茎におしつけながら声を出すのではなく、舌先で上歯茎を「はじく」ようにして発音されます。この「はじき音」のRは、英語でもイギリスの一部の方言に見られるもので、音の種類としてはLではなくRに属するため、ローマ字ではRが用いられたわけです。

電話の音を表す擬音で「RRRRRRRRRR」というのを英語の漫画などで見たことがあるでしょうか？これは舌先をぶるぶると振動させながら連続して上歯茎に触れたり離れたりを繰り返す音です。このような発音方法は「顫動音(せんだうおん＝ふるえ音/ trill)」と呼ばれ、スペイン語やイタリア語などにも見られますし、ロンドンの一部でもこの音を使う方言があります。

一方、英語本来の「L」の音は、舌先を上歯茎(上の歯の付け根あたりか、上の歯に触れないぎりぎりの位置あたり)に「押し付ける」ように構え、下の両側から声が出て行くというものです。(だから「側音」と呼ばれます。)

舌先を上歯茎にしっかり当てて声を出し、その声が自分の耳にしっかり入ってきたらその直後の母音を発音してください。日本語の「ら行」のように舌先を歯茎にぼんと当てるだけではなく、「押し付けたまま」声を出すのです。この要領で発音された La, Li, Lu, Le, Loは日本語の「らりるれる」と随分印象が違うことに気づくでしょう。このように英語のL音が綺麗に聞こえるコツは、「少し長めにLの音を出す」ことです。Lの発音時間が短すぎると、舌と歯茎の接触が「はじき」になってしまうため、「d」や「r」の音に聞こえてしまうことがあります。なお、この発音要領は「L音が音節の最初に来る」場合のもので、L音が音節末尾に来ますと発音の仕方が違ってきますので、その解説はあとに回し、まずL音が音節の最初に来る例で練習しましょう。

/ l / 音が音節の最初に来る単語の例 :

- | | | |
|---------|---------|------------------|
| • love | 愛;愛する | / láiv / |
| • lucky | 幸運な | / lák-i / |
| • leave | 置いていく | / lí:v / |
| • alive | 生きている | / ə-láiv / |
| • clock | 置時計・掛時計 | / klá:k , klók / |
| • black | 黒;黒い | / bláek / |

さて、/ l /の音が音節の最後に来ると上記の要領と違った発音となると言いましたが、どのような違いがあるのでしょうか。

これまで説明した「音節の最初にくるL」が、「Clear-L(明るいL)」と呼ばれるのに対して、「音節の末尾に来るL」のことを「Dark-L(暗いL)」と言います。このDark-Lは「舌先を歯茎につける」とかつかないを意識するより、「ただ口を丸めて終わる」だけでよいのです。まるで子音ではなく「オ」か「ウ」の母音が発音されたような印象を与えます。

例えば「people」という単語は「ピーぼー」のように聞こえるでしょうし、hospitalは「はすぺろー」、appleは「あぼー」、tableは「ていぼー」ように聞こえることでしょう。それでよいのです。このDark-Lに関しては、「唇を丸めて終わる」という要領を守りつつ、あとは音声サンプルの聞こえを真似て習得するのがよいと思います。

Dark-Lで終わる単語の練習：

- salt 塩 / só:lt /
- meal 食事 / mí:l /
- fail 失敗する / féil /
- male 男性;男性の / méil /
- snail かたつむり / snéil /
- people 人々 / pí:-pl /
- apple りんご / áe-pl /
- table テーブル / téi-bl /
- uncle おじ / áŋ-kl /
- ankle 足首 / áeŋ-kl /
- beautiful 美しい / bjú:-tə-fl /
- hospital 病院 / há-s-pi-təl, hós-pi-təl /

注意：

- peopleの発音記号を見て「おや?」と思った方はいませんか?これまで「音節は母音の数だけある」と言ってきたのに、people, apple, table, uncle は母音が1つしかないのに2音節ですね。これはDark-Lが半母音という性質(母音の性質を帯びた子音)を持つため、まるでそこに本当の母音があるかのように音節を作ってしまうためです。現実の発音としては、スペルに母音文字がなくてもDark-Lの直前に「曖昧母音」が自然発生してしまうと考えてもよいでしょう。(「beautiful」の第3音節などは、「-ful」ともともと母音があり、それがアクセントのないことで弱形化し曖昧母音となり、それがさらに脱落したというものですから音として曖昧母音が出ていても不思議はないわけです。)
- 曖昧母音が完全脱落したあと、母音なしで音節を構成できる子音には /l/ と /n/ があります。

★子音 / r /

英語の発音が話題になると決まって日本人の苦手な発音の代表のように言われるRの音ですが、実は全く難しくありません。もちろん、日本語の「ら行」子音で置き換えれば「違う音」だという印象を与えてしまいますが、「日本人に出せない音」では決してありません。

Rと違ってあまり問題意識を持たれないLの音にしても、日本語の「ら行子音」とは全く違うことを学びました。同様にRの音も日本語にない音です。逆を言えば、英語話者が日本語を学ぶとき、日本語の「ら行」子音を日本人のように発音できるようになるには少々苦勞するものなのです。

Lの音では舌先が上歯茎に押し付けられていましたから、声は舌の両側を抜けて口から出ました。Rの発音では舌先が上顎に触れていませんので、舌先と上顎の間と舌の両側の全てから口へと声が出て行きます。この声の通り道の差が2つの音を聞いた印象の違いとなります。

最初「あー」と普通に声を出してみてください。そのとき、舌はべたっと寝かされています。それから舌先を巻き上げ気味に持ち上げて上顎の中央よりやや前あたりへと向けていってください。声は出し続けて。舌先が上顎に接近するに従って「あー」という声が「らー」や「るー」のように音質変化していくのが分かるでしょう。舌先を上顎に触れさせない程度で止めます。それが「R」の発音です。簡単でしょう？

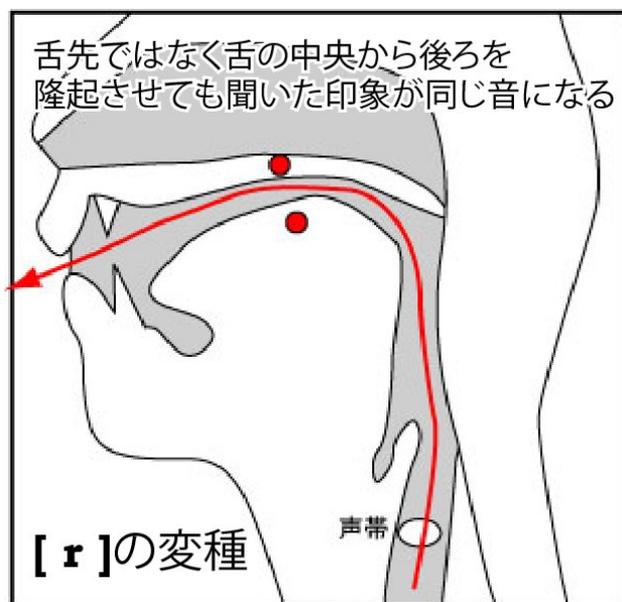
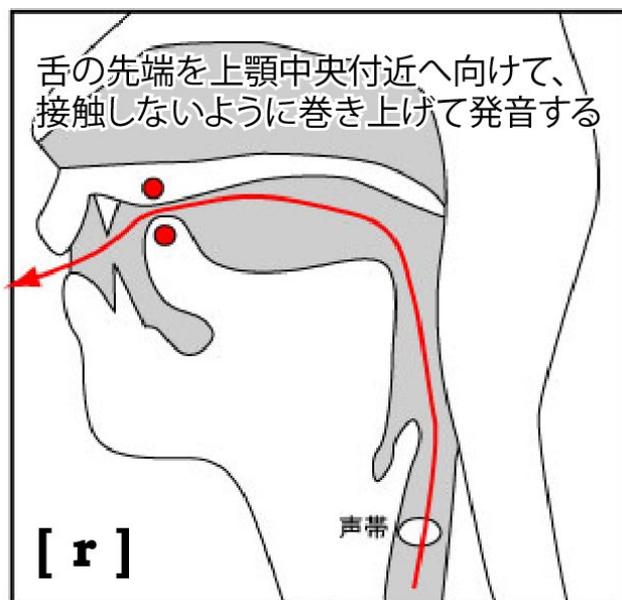
特にアメリカ英語に見られる「Rの変種」として舌先を巻き上げるのではなく、舌の中央から後ろにかけての部分で隆起することで同じような音色を作り出すものもあります。これは地域差や個人差によるものですが、どちらの要領で発音しても結果は同じですから、どちらでもやりやすい方を採用して構いません(後者の音は前者よりさらに日本語にない音なので、恐らくは前者の方がやりやすいとは思いますが)。それでは練習しましょう。

/ r /の音を含んだ単語の例：

- run 走る / rʌn /
- read 読む / ri:d /
- rude 無作法な / ru:d /
- rock 岩石 / rɑ:k , rɒk /
- trip 旅 / tríp /
- strike 打つ / stráik /

注意：

上記例はすべて1音節語です。最後の「strike」は最初に「str-」という3つもの子音が連続していますが、間に不要な母音を挟まないようにしてください。難しいと感じたら、最初「tike」と子音を1つだけにし



て発音してみて、次に「trike」それから「strike」と同じリズムを保ちながら子音を追加していきます。音のリズム(拍)として「strike」は「I(私)」と全く同じなのです。

よく「LとRの聞き分けが苦手」という声を聞きます。「音の聞き分けが苦手」な理由は常に「音の出しわけ」ができていないことによります。自分がLとRの発音を区別できれば、この2つが違った音として認識できるようになります。丁寧に発音しながら、自分の耳で自分の声に耳を傾けましょう。2つの音の識別を目標に次のペアで練習しましょう。

LとRの発音区別の練習：

- love 愛;愛する / lʌv /
- rub こする / rʌb /

- live 住む / li:v /
- rib あばら骨 / ri:b /

- load (荷を)積む / lóʊd /
- road 道路 / róʊd /

- lead 導く / lí:d /
- read 読む / rí:d /

- led leadの過去形 / léd /
- red 赤;赤い / réd /

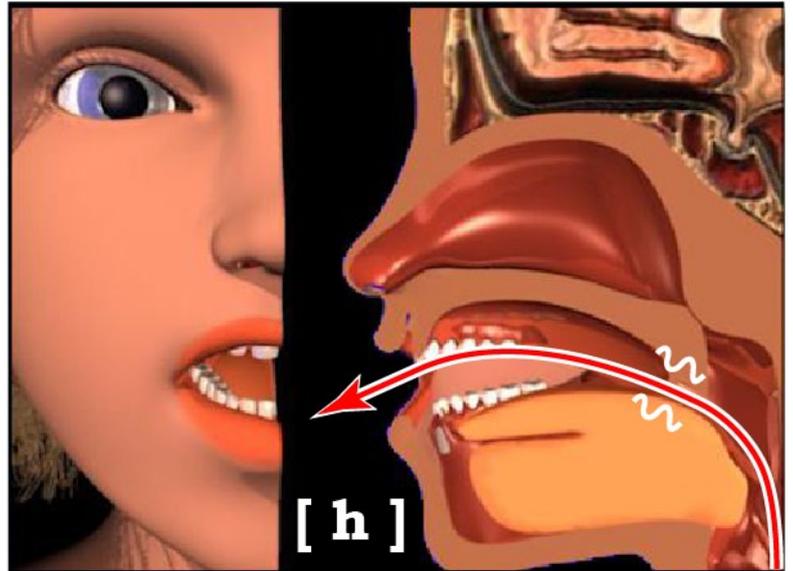
使用部位 音の種類	両唇音 Bilabial	唇歯音 Labiodental	歯音 Dental	歯茎音 Alveolar	後部歯茎音 Postalveolar	反転音 Retroflex	口蓋音 Palatal	軟口蓋音 Velar	口蓋垂音 Uvular	咽頭音 Pharyngeal	声門音 Glottal
破裂音 Plosive	p b		t d			tɖ	c ɟ	k ɡ	q ɢ		ʔ
鼻音 Nasal	m	ɱ	n			ɳ	ɲ	ŋ	ɴ		
顫動音 Trill	ʙ		ʀ*						ʀ		
単顎音 Tap/Flap			ɾ			ɽ					
摩擦音 Fricative	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ʂ ʐ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
摩擦側音 Lateral fricative			ɬ ɮ								
接近音 Approximant	w*	ʋ	ɹ			ɻ	j	(w)	ɰ*		
接近側音 Lateral approximant			l			ɭ	ʎ	ʟ			

IPAの子音一覧では英語の“r”の音は /ɹ/ という特殊記号が当てられており、通常の r の文字はスペイン語などに含まれる「顫動音(せんどろおん:ふるえ音)」に用いられています。しかし英語の中で /r/ と /ɹ/ を区別する必要はありませんので、本書ではあえて見慣れない記号を追加せず /r/ 記号を英語の r 音を表すものとして使用しています。辞書によってはIPA一覧通りの記号を用いているものもありますが、/ɹ/ の記号に出会っても驚かないように。要するに「英語の r 音」のことですから。

★子音 / h /

日本語の五十音の音の配列があちこちで変則的であり、1つの行について同じ子音を用いていない例が多いということを示すために述べましたが、「は行」もその典型です。

「はひふへほ」は訓令式ローマ字なら「ha, hi, hu, hu, he, ho」と全部「h」を子音としますし、ヘボン式でも「ha, hi, fu, he, ho」と「フ」の子音だけにFを用いていますが、その音の出し方は、IPA(国際音標アルファベット)にすると / **x**a, **ç**i, **ɸ**u, **h**e, **h**o / と、なんと「he, ho」以外英語には使われない随分特殊な記号で表される音を日本人は使っているのです。(「どんな音」かは自分で出しているのです。本来説明を聞くまでもないのですよ。)



舌の奥が持ち上がり軟口蓋との隙間を強い空気の流れて摩擦が起きる。唇の形は次に続く母音の発音準備をするので定まっていない。

日本語の「は行」子音はどれも摩擦の音ですが、「口の中のどのあたりで起きている摩擦」かによって表す記号が異なります。英語の / h / 音は、「へ、ほ」だけに共通した音であり、これは舌の付け根近くが持ち上がり、軟口蓋との間を強く息が抜けるときに起きる摩擦の音です。その音を「は行」全部には使っていないんですね。

「**は(xa)**」というときは口の開きが「あ」を言う準備としてすでに開きが大きいので、hの音を出すにも喉の奥の隙間も広がっており、通常のhよりも強い息が使われています。(言われてみればそうだなと感じるでしょう?)

「**ひ(çi)**」は喉の奥ではなく、舌全体が上に上がって上顎の中央より前の隙間で息の摩擦が起きていることがわかるでしょうか。この子音にそのまま「あいうえお」をつなげると「ひゃ、ひい(ひ)、ひゅ、ひえ、ひょ」となります。(この子音は英語にはありません。だから「百円(ひゃくえん)」という発音が英語話者は苦手です。日本語初心者は皆「はくえん」としか発音できません。)

「**ふ(ɸu)**」は丸めた唇を通過する息の摩擦音です。この子音のまま「あいうえお」をつなげると「ふぁ、ふい、ふう(ふ)、ふえ、ふお」になるわけです。

このように日本語の「は行」子音のうち「は、ひ、ふ」までが英語の「h」の音ではないのです。ということは、「hat, hit, hook」を日本語の「は行」子音で置き換えられないということです。

英語の子音 / h / は、次にどんな母音が続くときも同じ音として発音されます。すなわち、日本語の「へ、ほ」を言うときの子音であり、舌の付け根あたりと軟口蓋との摩擦で出される音でなければ / h / ではなくなるのです。

予備練習として英語の / h / に日本語の「あいうえお」を組み合わせ発音してみましょう。

/ h+あ / : ほぼ「は」と同じですが、舌を全体的にやや奥にずらす気持ちにすると舌の付け根と軟口蓋の間隔が狭まるので / h / になります。

/ h+い / : 日本語の「ひ」を忘れること。口を横に引っ張ると「ひ」になりますから「へ」を言う構えを先に

作って、ほんの少しだけ唇の両側を左右に引くだけにします。hitなんていう簡単な単語でも、hiを「ひ」で読まず、「へ」に近い音にすると英語本来の hit の発音になってきます。

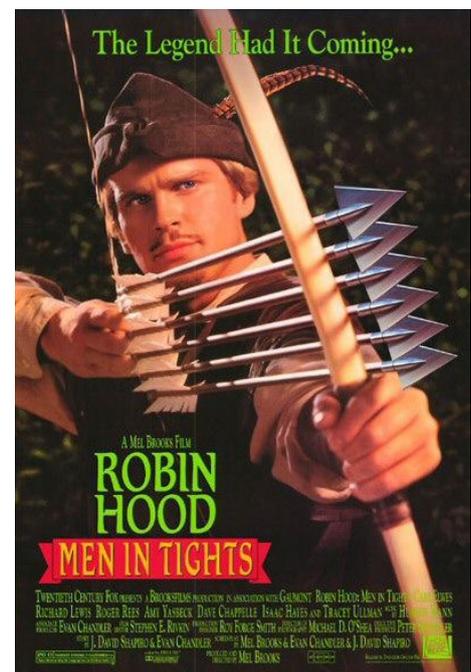
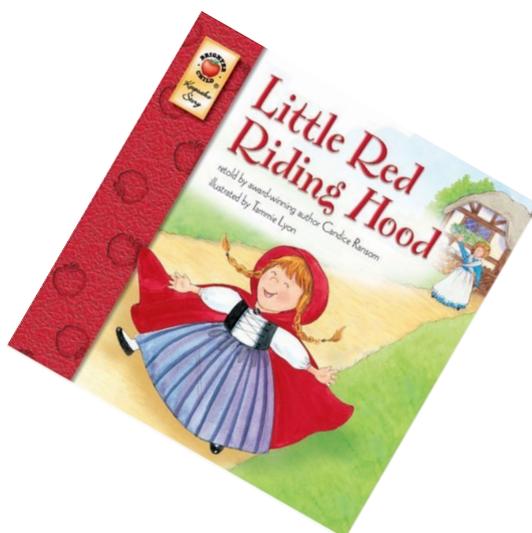
/h+う/:日本語の「ふ」を忘れること。「ほ」を言う構えをまず作ります。そして唇だけ丸みをもっと強めてやります。普通に「ふ」を言う構えに比べて口の中が広がっているのがわかりますか?「ほ」を言うときと同じく摩擦は舌の付け根と軟口蓋で発生し、唇を通過するときには発生しません。イギリスの伝説的英雄「ロビン・フッド(Robin Hood)」や、「赤ずきんちゃん(Little Red Riding Hood)」に見られる「hood」は「フッド」でも「フード」でもなく、「ホッド」に近い音です。「ほ」を言おうとしているんだけど、唇の丸みをもっと強いのでどうしても/hu/の音になるというふうに理解してください。

/h+え/と/h+お/はそのまま「へ、ほ」で構いません。

いかがでしょうか。思った以上に英語の/h/は手ごわいでしょうか?でも日本語の「へ、ほ」で使っているのですから出せない音ではありません。その子音と「同じ音」をあとにどんな母音が来ても出すのが、最初は難しく感じるだけです。では「舌の付け根と軟口蓋の隙間を息が通るときの摩擦」ということを意識して練習しましょう。

/h/で始まる単語の練習:

- hat (ふちのある)帽子 /hæt/
- hut 小屋 /hʌt/
- hot 熱い /hɑ:t, hɒt/
- hit 打つ /hít/
- heat 熱 /hi:t/
- hear 聞こえる /hiə, hiər/
- head 頭 /héd/
- hook 留め金;ホック /hʊk/
- hood ずきん /hú:d/



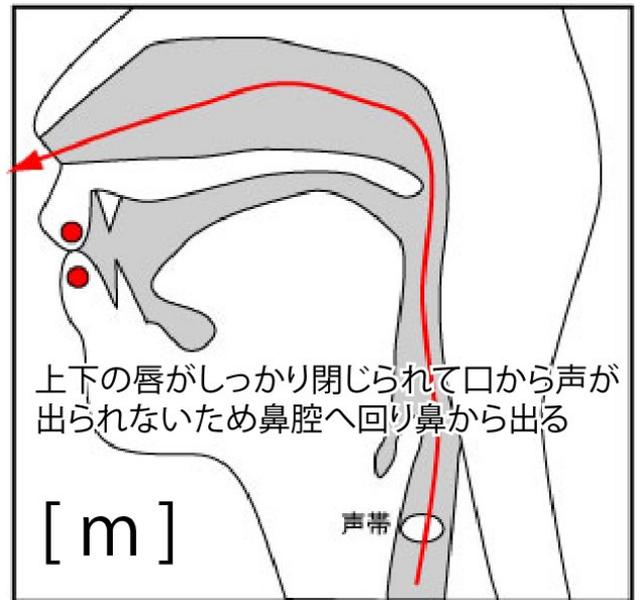
★子音 / m /

上下の唇が閉じられた状態で声帯を振動させると、口からは呼気が出ることができないため、自然と鼻腔(鼻の奥の空間)へと通じる路が開きます。口腔(口の中の空間)と鼻腔の響きが / m / の音色となります。

この音も自分が出す / m / の音を耳で確認してから次の母音を発音するというくらい / m / の響きをしっかり出すことがポイントです。特に単語の末尾に / m / の音があるときは声帯の振動をすぐ止めてしまわないようにしましょう。

/ m / の音を含む単語の練習 :

- moon 月 / mú:n /
- mood 気分 / mú:d /
- meet 出会う / mí:t /
- man 人間;男 / mæn /
- room 部屋 / rú:m /
- tomb 墓 / tú:m /
- comb くし / kóʊm /



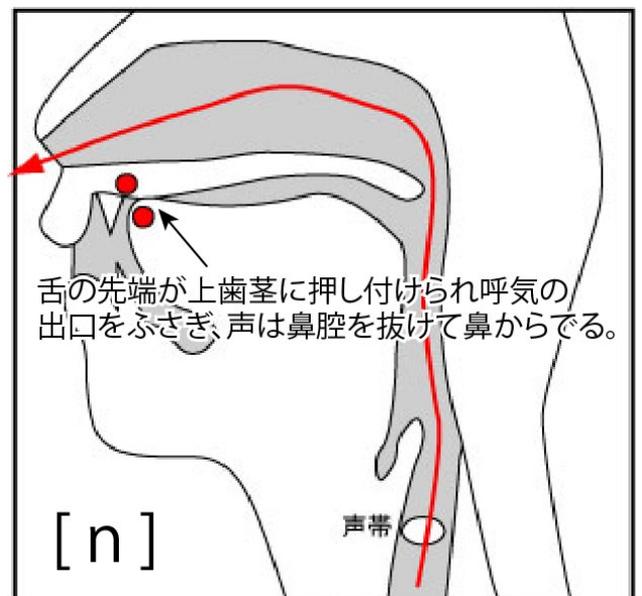
注意:

- tombとcombは1文字目だけの違いに見えますが、その他の部分の発音も大きく違います。英単語の発音とスペルが機械的な一致をしていない好例ですね。
- 詳しくは次に述べますが、moonやmanの末尾の / n / は日本語の「ん」ではありません。舌尖を上歯茎につけた状態で終わってください。

★子音 / n /

色々な発音解説書を見てきましたが、どれも一様に「Rの発音」あたりにスポットを当てている反面、 / n / について注意を促しているものが滅多に見当たりません。音そのものは「な行」子音と変わらないので誰にでも簡単に出来るのですが、特に単語の末尾に来る / n / をローマ字的に日本語の「ん」で置き換えている人が非常に多くいます。もし / n / が「ん」なら、naというローマ字が「な」と読める理由がありません。

かなり英語が上手な人の発音であっても目をつぶっ

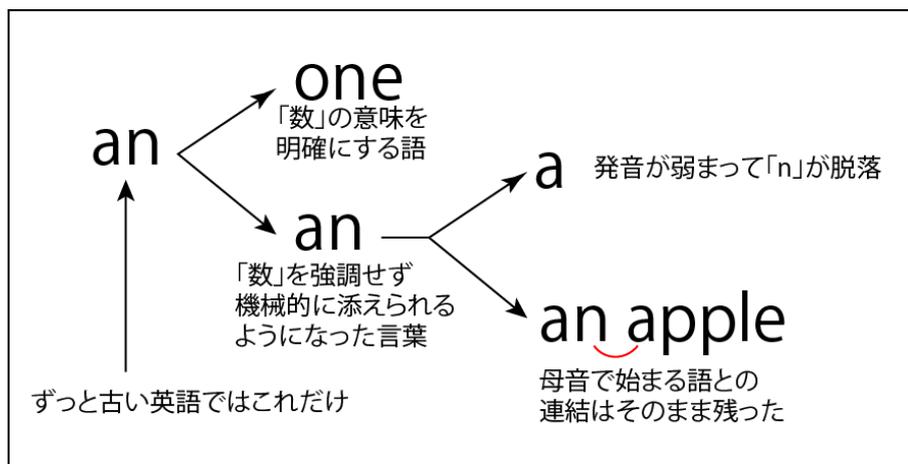


て聞いていて「日本人の発音だな」と感じさせるのは、この /n/ が上手に出せているかが1つのポイントになります。「pen」や「man」のような簡単な単語でも「ペン」、「マン」というカタカナ風の「ン」で代用している人が多くそれは /n/ ではなく /ŋ/ という記号で表される音です。英語のスペルとしては「-ng」が使われるところですから、「ペン」は「peng」、「マン」は「mang」というスペルを読んでいるように聞こえるのです。

英語の /n/ は単語のどの位置に現れる場合でも発音の仕方は常に同じで、舌尖を上歯茎、上の歯の付け根あたりにしっかりと押し付けることで口から出る声をせきとめ、それが鼻に抜けるときの響きの音です。「なにぬねの」を非常にゆっくり、粘った感じで発音してみてください。「んな、んに、んぬ、んね、んの」というふうにです。このとき自分の舌尖が上歯茎にしっかりと押し付けられているのが分かりますね。その「接触状態」こそが /n/ なのです。接触しないで出す音は /n/ ではありません。

「a book」というときは「a」を使うのに、「an apple」では「an」になることをご存知ですね。なぜでしょう？そういうふうに「ルールで決まっている」から？いいえ、そんな人為的な決まりごとに従っているわけではありません。

古い英語では、まず最初に「an」という単語があり、これが「1つの」という意味を持っていました。言うなれば、その当時は「book」の前でも「an book」だったわけです。まだ「冠詞」という文法的な働きがはっきりしていない大昔のことですが、やがて「1つ」という数字の意味を明確に伝える単語として「one」に変化し、その逆に「数が1つであることはあまり強調せず、ほぼ機械的に単数の名詞につく冠詞」としての an に分かれました。そしてさらに「an」の発音が弱まって語尾の「-n」が脱落し「a」が生まれたという歴史があります。



「an + pen」のように次に子音が続くときは「-n」が脱落してしまいましたが、「apple」や「orange」のように母音で始まる単語が追いかけるときは、an の末尾の /n/ の音を出すとき舌尖が上歯茎についた状態から母音を出すことで自然と「な行」のような音になり(これを音の連結といいます)、nが脱落しない方が、かえって読みやすいため、そのまま古い形の「an」が生き残ったわけです。英語では母音で終わる単語をまた母音で始まる単語が追いかける「母音衝突」を発音しにくいと感じるため、間に子音が挟まっていた方が読みやすいんですね。

このように「an apple」で「an」が使われるのは「特別」なのではなく、むしろそれがもともとだったので。an の -nを脱落させる理由がないため、そのままの形として生き残ったというのが正しい理由です。

日本語風に「an」を「アン」と読んでみると「あんあっぷる」と発音することになんの抵抗もないでしょう。しかし英語本来の /n/ を発音していると、自然と次の母音と音がつながってしまうものなのです。(よほど意識的にゆっくり区切って読まない限りは。)pineappleにしても「パイン・アップル」というより「パイナップル」といいいますよね。

/ n / を含む単語の練習 :

- need 必要とする / ní:d /
- net 網; ネット / nét /
- knot 結び目 / ná:t , nót /
- pin ピン / pín /
- pen ペン / pén /
- ten 10; 10の / tén /
- one 1; 1つの / wán /

注意:

- 特に /n/ で終わる単語の発音に注意しましょう。日本語の「ん」にせず、しっかりと舌先を上歯茎に押し付けた状態で発音が完了します。「ぬ」を言いかけて母音を言わずに途中で止めたような響きとなります。

/ n / で終わる語を母音で始まる他の語が追いかける例 :

- an n apple / ənæpl /
- in n it / ínɪt /
- on n it / á:nɪt , ónɪt /
- when n I was young / w(h)enəɪ wəz jáŋ /

注意:

- / n / の箇所ではしっかりと舌先を上歯茎につけ、次の母音と音の連結を起こしてください。連結箇所が分かりやすいように上の発音記号はわざと / n + 母音 / のところに隙間を開けずに書いてあります。

参考:日本語の「ん」について

英語の / n / を日本語の「ん」としてはいけないことについては既にお話しました。ここで英語から少し離れて「日本語」についても考えて見ることにしましょう。英語の発音学習を通じて今まで気づかなかった日本語の問題についても意識を向けてみるのも「英語学習の意義」の1つだからです。

日本人は「ん」という1つの平仮名で、実はかなり多くの種類の音を表現しています。日本語の「ん」が何通りの音を表しているかについては、多くの意見があり中には10通りもの音を表しているという説さえありますが、日本語音声学の専門家でもない限り、あまり細かすぎる分類をする必要もないと思いますので、ごく大雑把に「4種類」の音に分けてみましょう。

(1) / m / の音を表す「ん」

辛抱(しんぼう)
販売(はんばい)
混迷(こんめい)
反発(はんぱつ)

この「ん」は次に「上下の唇を閉じなければ発音できない音」が続くときのものです。平仮名で書いた1文字1文字を区切って読むのではなく、自然な速度で読み上げたときは、次の発音の準備をしようとするので、/p/b/ と /m/ の直前の「ん」はすでに唇を閉じて発音されます。つまり /m/ の音を出しているわけです。

(2) / n / の音を表す「ん」

反対(はんたい)
判断(はんだん)
犯人(はんじん)
関知(かんち)
肝心(かんじん)

これらは次に来る音が / t/d / や / n / のとき、つまり「舌尖を上歯茎に当てて声や息をせき止めるタイプの音が追いかけるときのものです。これもまたその音の発音準備の構えとして「ん」ですすでに舌尖が上歯茎に当てられますので、英語の / n / と同じ音を出しています。

上歯茎に舌尖が当たる音として「ら行」子音が続く場合もありますが、/ t/d, n / と違って「ら行」子音は声をせき止めません。歯茎に触れた舌の両側から出て行くことができるので / n / の音とはまた違うのですが、「舌尖を上歯茎につける『ん』」ということで第2のグループに入れておきます。

判例(はんれい)
管理(かんり)
婚礼(こんれい)
貫禄(かんろく)

(3) / ŋ / の音を表す「ん」

暗記(あんき)
今回(こんかい)
半額(はんがく)
歓迎(かんげい)

これは /k/g/ の直前に現れる「ん」です。(1)(2)同様あとに続く音を出す準備として自然に /ŋ/ という舌の付け根あたりが軟口蓋に接触し、口からは声が出ない形をつくります。

(4) 日本語特有の「ん」

範囲(はんい)
恋愛(れんあい)
本屋(ほんや)
婚約(こんやく)
山陽(さんよう)

これらは英語にない日本語特有の「ん」であるため、英語話者はこのような例の単語の発音で苦労します。英語話者は「n」と書いてあれば舌先を上歯茎につけますので、その後に母音や半母音「y」の音が追いかければ無意識に「音の連結」を起こしてしまうため、「婚約」は「こんにやく」になってしまいます。

ローマ字では、「n」が次の母音と組み合わせさせた「ナ行」ではないことを示すために「han'i, ren'ai, hon'ya, kon'yaku, san'yo」と表記しますが、そのように書いてあっても、この種の「ん」の音が英語にはないので英語話者には正しく発音できません。

次に母音や半母音「y」が来るときの「ん」は極めて母音的性格を持っており、だからこそ次の母音の子音にならず互いに独立したまま発音されます。

なお日本語特有の「ん」としては、文末の「ん」があります。これは「母音の前の『ん』」と極めて似ており、後に全く何の音も続かないときの「ん」であっても英語の / n / のように舌先は上歯茎に接触しません。

本(ほん)
缶(かん)
金(きん)
損(そん)

ただしこれらの語が文中に用いられ「本が」になれば「ほん」は「hoŋ」と発音されますし、「損をした」なら「母音直前の『ん』」と同じになります。

(5) その他の「ん」

基本理解としては上記4通りに大雑把に分けるだけでも十分かと思うのですが、さらに次のような場合を追加する意見もあります。

(a) 「ん」の前の母音が鼻母音化する場合

これは「安易(あんい)」などで「ん」そのものが発音されているというより「あ」という母音が鼻母音に変化した様子を「あん」という表記で表しているという考え方です。

(b) /ɲ/ という特殊記号で表される「硬口蓋鼻音」

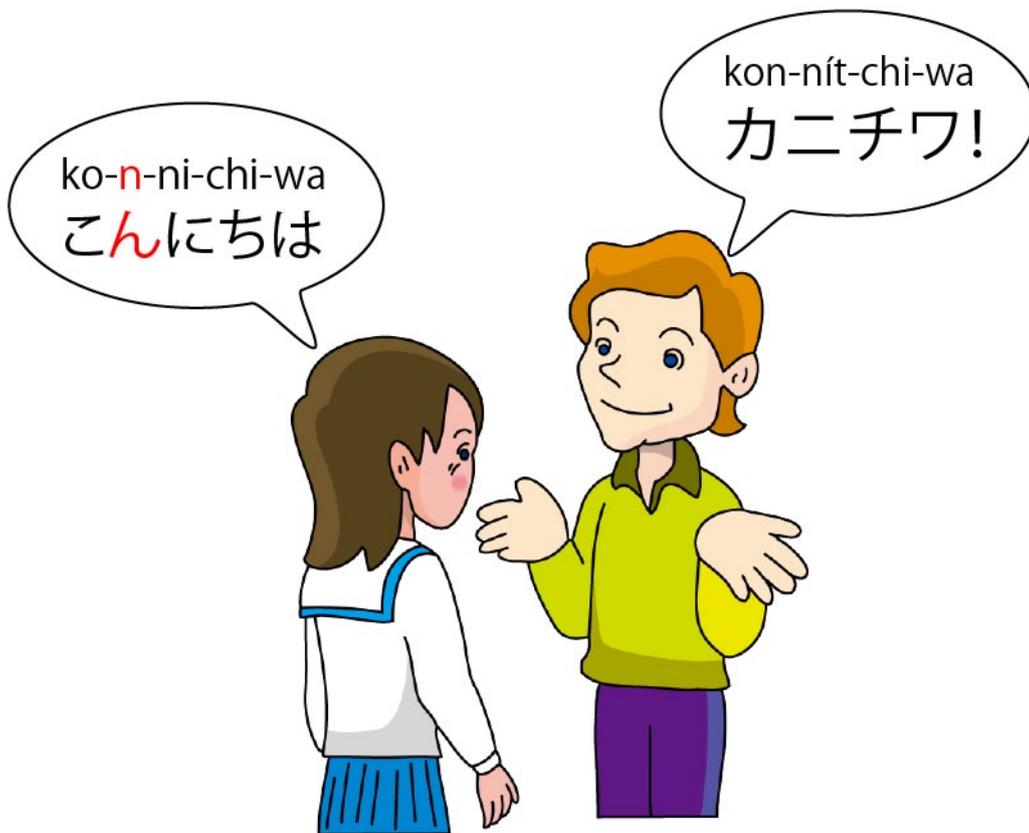
これは直後に / ɟ / 音つまり「ひゃ行」音が来るときの「ん」だそうです。

修繕費(しゅうぜんひ)
批判票(ひはんひょう)

日本語の「は行」子音のうち「へ、ほ」のみが英語の / h / であり、「は、ひ、ふ」の子音は / x, ç, φ / という英語にない音だという話をすでにしました。「ひゃ行」は「ひゃ、ひい(ひ)、ひゅ、ひえ、ひよ」であり、「ひ」は本来「ひゃ行イ段」に位置する音です。その「ひゃ行」の子音は舌の中央部分あたりが上顎の手で触って硬い部分(硬口蓋)に接近して発音されるため、その直前の「ん」は発音準備のため、同じ位置に舌が持ち上がります。他の「ん」とは確かに位置が異なるため、これを1つの種類として分類する考え方があります。

このように日本語の「ん」は厳密には実に様々な音の出し方をしているのです。同じ「ん」であっても、前後の音の並びによって多くの「異音」を持っているわけですね。しかし日本人にとってはどれも「ん」だと聞こえているのです。

日本人にとっては「同じ『ん』」であっても他の言語話者には別々の音であったりもしますので、こうして冷静に「音そのもの」を考えて見ることは英語に限らず外国語の発音習得に必ず役立ちます。



英語話者にとって日本語の「ん」の習得はなかなか大変なようです。まず英語の発音習慣の中で「音節」の区切り方が日本語と違うため、「ん」を一拍として発音する感覚がなく、「こんにちは」の第1音節の母音に「ん」の「n」が吸着してしまうため、「こんにちは」が5拍ではなく4拍のリズムになってしまいます。「こん『に』ちは」の「に」に強勢を置いて発音してしまうため、次の「ち」の発音準備として「t音」までを「に」が吸着します。

日本人が日本語の発音習慣からなかなか脱却できないのと同様、英語話者たちも日本語特有の発音には苦労するものなのです。